

---

# ドラゴンクエスト? そして現実へ...

あちゃ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ そして現実へ…

### 【ΖΖΠード】

Ζ6325X

### 【作者名】

あひや

### 【あらすじ】

DOI?の世界に『友と絆と男と女』のリュカが迷い込みました。チャラいノリでなんとか生きて行く…そんなDOI?です。

ヌルい作品ではございますが、じ了承下さい。

今作品の前に私の「ドラゴンクエスト？友と絆と男と女」をお読み頂けると、より一層楽しんで頂けるはずです。  
よろしくお願い致します。

## プロローグ

「アリアハン」

「勇者オルテガの娘アルルよ、よく来た！面を上げよ  
ここはアリアハン城内、謁見の間。

玉座に座るアリアハン国王を前に、少女が一人傳いている。  
少女の名は『アルル』

10年前、魔王バラモスを倒すべく一人旅立ち、火山で死亡した『  
オルテガ』の娘である。

「昨今、魔物の活動が活発になつてきていると言う。世界を救う為、  
人々を救う為…そして志半ばで倒れた父オルテガの為、勇者アルル  
よ！魔王バラモスを成敗して来るのだ！」

「は！微力ではありますが、全力を尽くします！」

少女は力強く答える。

「うむ！…オルテガと同じ轍を踏まぬよう、ルイーダの酒場へ行き  
旅の仲間を集めよ」

国王は立ち上がり謁見の間を出て行く。  
大臣の一人が少女へ近付き、幾ばくかのゴールドと装備の入った袋  
を手渡し退室を促す。

アルルは城を出るとすぐに先程手渡された袋の中身を確認する。  
中にはこん棒2本、檜の棒1本、旅人の服1着、50ゴールド…

「何これ！？ショボ！」

思わず大声を出してしまった自分に驚き、慌てて人気のない裏路地  
へ逃げ込むアルル。

「はあ～」

アルルは深い溜息と共に、再度手渡された袋の中身を確認する。

「何度見てもショボイわね…」

満を持してアリアハン王国が、世界へ旅立たせる勇者へ贈る祝儀としては溜息の出るレベルである。

「誰か途中でちょっとねたんじゃ無いでしちゃうね！？・装備品はともかく、50ゴーレドつて…その100倍あつても良くない？」

アルルは愚痴をこぼしながら人気のない裏路地から川沿いの小道へと移動する。

幼い頃より『勇者』として使命を帯びた人生を歩んでいたアルル。剣術も魔法も鍛錬を怠った事はなく、同じ年頃の少女としてはかなりの手練れではあるものの、魔王討伐にたつた一人で赴くつもりは毛頭無い。

従つて国王に言われるまでもなく、旅の仲間を求めルイーダの酒場へ赴いているのだが…

『この旅は辛く過酷な旅であろうから、最低でも仲間はあと3人はほしい！でも50ゴーレドじゃあまともに装備を揃える事も出来ない…1人ぐらいは装備品の有無に拘わらず、強い仲間が必要ね！居るかしら、そんな都合がいい人？』

アルルが一人先の展望を考え歩いていると、前方の空間に奇妙な穴が出現した！

「な、何よ！あれ？」

地上3メートル程の何もない空間に何処へ通じているのか分からな  
い穴！

好奇心から穴の側に近付くと…

ドサツ…！

穴から何かが落ちてきて、穴は閉じてしまった…

「いたいたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すつて！しかも此処、何処だよ！？何で僕がこんな所に来なきゃいけないんだよ！…」

穴から吐き出されたのは、一人の青年だった。

20代半ばの青年は、紫のターバンを巻きマントで体を覆っているが、その体躯は歴戦の強者を醸し出している。

手には竜を形取った杖を携え、顔立ちは整った美青年である。

そして何より吸い込まれそうな程透き通った瞳が印象的な青年だ。その青年がアルルに気付き、視線を向け優しく心地よい声で話しかける。

「やあ、こんにちは

10人の女性が居たら、10人とも見とれるであろう青年に、アルルも例外なく見とれ呆けている。

「見ていたら分かると思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…その前に、此処どこ？」

## プロローグ（後書き）

どうもあちゃです。

またやります。

次話の「裏プロローグ」も同時投稿。

二つ読んで初めて一つのプロローグです。

応援よろしくお願いします。

ご感想お待ちしております。

見切り発車なので間隔開くかも…

## 裏プロローグ

「グランバニア」

魔界の魔王ミルドラースを倒してから7年の歳月が流れた、「このグランバニアでは国民に絶大な支持を得ている国王が、今日も気ままにメイドをナンパしている。

「やあ、エルフィーナちゃん。今日もキレイだね！ 今夜あたり僕とどう？」

とても国民に絶大な支持を得ているとは思えぬキャラで、メイドを口説く国王…

「リュカ！ いい加減にしなさい！ また愛人増やすつもり！ ？」

「やや！ ？ 違うッスよ、ビアンカさん！ ！ これは僕流の挨拶ッスよ！」

王妃に叱られるも、全く堪えない男… それがグランバニア国王リュカである。

リュカとビアンカの間には3人の子供がいる。

長男のティミー17歳、長女のポピー17歳、そして次女のマリー7歳。

ポピーは半年前、友好国のラインハットの王子コリンズの元へ嫁いだ為、現在はティミーとマリーが正式なグランバニア王家の血筋である。

現在ティミーは身分を隠匿し、城の兵士として働いている。またマリーも城下の学校へ平民として通っている。

そのティミーが国王直属の近衛として配属されてから半年、今日も執務室で父親にからかわっていた…

「ねえ、ティミー… いい加減彼女作れよ… 一人で良いからさあ…」

「僕の好みの女性が居ないんです！ほつといて下さい」

以前から繰り返されたやり取り…しかし、娘の一人が嫁ぎ親元を離れた事もあり、以前よりしつこく彼女を作る事を進める父…そんな何時もと同じやり取りに、何時もと違う事態が訪れる。

「あれ？何だこれ！？」

それは、執務机に山積みになつた書類の中から出てきた1冊の分厚い大きな本である。

その性格に似合わず綺麗好きなりュカは、整理整頓はきつちり行つていた為、机の上に置かれた見慣れぬ本に違和感を憶えていた。

「何だよ！誰だよ、勝手に置いていったのは！？て言うか、何処から持ってきたんだよ！？」

そう文句を言いながらも、本を開き読み始めるリュカ。（基本、読書好きである）

本には前書きがあり、そこには…

【人生という物語には各々主役が存在する。主役は別の主役と出会い、そしてまた新たな物語が紡ぎ出されて行く。この物語はそんな物語の一つである。】

そして次のページにタイトルが…

【そして伝説へ…】と…

「何だ！？随分と面白そうじゃないか！…」

リュカは書類の山には手を付けず、本の続きを読もうとしている。しかしページを捲り終えた瞬間、大声で激怒し始めた。

「何だこりや！？続きのページには何も書かれて無いじゃん！…バカにしてるの！？偉そうなタイトル付けやがつて！」

ページを何枚か捲り、全てが白紙である事を確認したリュカはタイトルページに戻り、徐にペンを手にする。

「何が【そして伝説へ…】だよ！現実なんてこんなもんだよ！…タイトル直してやる！」

リュカはタイトルの【そして伝説へ…】にペンで2本線を引くと、自らタイトルを書き直した…【そして現実へ…】と…

すると本が突然輝きだし目の前のリュカを吸い込み始めた！

慌てたリュカは手近にあつた物を掴み難を逃れようとしてみたが、掴んだ物が常用している『ドラゴンの杖』だった為、杖ごと一緒に吸い込まれてしまった。

＜アリアハン＞

ドサツ！！

リュカは地上3メートル程の所に開いた穴から吐き出され、受け身をとることなく地面に落ちた。

「いたたたた…何だよ…乱暴に吸い込んで、乱暴に吐き出すって！しかも此処、何処だよ！？何で僕がこんな所に来なきゃいけないんだよ！？」

そこは先程まで居た執務室とは明らかに違つ。そこは先程まで居た執務室とは明らかに違つ。

そして目の前には16・7歳くらいの少女が驚いた表情でリュカを見ている。

「やあ、こんにちは」

どう見てもそこはグラムバニアとは違い、過去の記憶から別世界へ迷い込んだ事を察したリュカは、目の前の少女を脅かさない様に話しかける。

「見ていたら分かると思うけど…僕、違う世界から来たんだよね！でも、怪しい者じゃないよ！出来れば帰る手立てを探したいんだけど…その前に、此処どこ？」

青年と少女の冒険の物語が始まろうとしている。

## 旅は道連れ（前書き）

やつといわ、本編突入！

色々書きたい事はあるんだけど…

まあ、ともかくもお楽しみにぞ。

## 旅は道連れ

### 〈ルイーダの酒場〉

そこは大勢の人々で溢れかえっていた。

まだ昼前だと言うのに、酒を飲んでくだを巻く冒険者達で…

「貴女か噂の勇者様ね。ルイーダの酒場へようこそ。ここは出会いと別れの場よ」

酒場の女主人『ルイーダ』が妖しく美しい表情で一人に話しかける。何故この二人が連れ立つてこの様な場所に来たかと言うと…アルルの真剣な思いと、リュカのいい加減な思いが合わさり化学反応を起こした結果である。

簡単に言うと、自己紹介を終えた一人は互いの状況を説明、助力を願い互いに承諾。

アルルの願いは「見るからに旅慣れした屈強な戦士（風？）の男に魔王討伐の手助けをしてもらう事」

リュカの願いは「ともかく帰りたいけど、どうして良いのか分からぬから、どうせなら美少女と一緒に居る方が楽しいし一緒に付いて行こうかな…」

である。

互いの思いの温度差に気付くことなく、状況は変化し更なる仲間を求めるルイーダの酒場へやつて来た…

「あの、魔王討伐に旅立ってくれる冒険者は居ますか？」

「さあね…そこらに居るんじゃないかねえ…」

アルルの真剣な眼差しも感銘を受けることなく一瞥して終わるルイーダ。

「あははは…昼真つから飲んだくれる連中が役に立つのか？まあ…

使い捨ての盾ぐらいにはなるか！あはははは！」

酒場を見渡したリュカが腹を抱えて笑い出す。

リュカの透き通った声はこの喧噪の中でも、人々の耳に届く声の為、酒場内は一斉に静まりかかる…

血の氣の多い冒険者達の中、一人の男がリュカの前へやつて来る…リュカの身の丈程あろう戦斧を肩に担ぎ、リュカより頭2つは大きい男…

「聞き捨てならねえな！俺は最強の戦士ボーデン！テメエーの様なヒヨロ男なんぞ、瞬殺してやんよ！！」

「あー…あんまり自分で最強の戦士って言わない方が良いよ…ものつそい格好悪い！」

自称最強の戦士の矜持を傷つけるには十分すぎる発言だった。

「き、貴様ー！…」

自称最強の戦士は手にした戦斧をリュカに向け振り下ろす！

その場にいた誰もが軽口を叩く男の無惨な死体を予想した…だが現実は、左手の親指と人差し指で戦斧の刃部分を掴み、顔色一変えず受け止めている男と、顔を真っ赤にして戦斧を振り下ろそうと藻搔いている大男の姿だった。

周囲の誰もが目を見開き驚愕する…

昼間から飲んだくれてはいるが、実際にその男はかなりの強さではあるのだ。

大男の戦斧は微動だにせず、押し切る事も、引き抜く事も出来ない。

「ぐおおおー！は、放しやがれええ！…」

顔を真っ赤にして呻く大男に気付いたリュカは、

「あ、ごめん。忘れてた」と、手を離す。

その瞬間、全体重をかけ戦斧を引き抜こうとしていた大男は支えを無くし、後方へ大きく吹っ飛んだ！

大男は2メートル程離れたテーブルの上に背中から落ちる…

大量の酒が並んだテーブルを酒瓶やグラスと共に押し潰し、大男の

意識は遙か彼方に飛び去った。

静寂が包む中、緊張感の無い声が響き渡る。

「あー…この中で我こそはって言う人いない？魔王バカボンを倒す旅に協力してくれる人は！？」

「バラモスです！魔王バラモス！！」

「ん？ああ…それそれ…！で、どう？」

周囲を見渡すリュカ…

しかし先程までの喧噪はなく、酔いの覚めきった自称冒険者達は俯き呟くのみ…

「アンタ…俺達に死ねと言うのか…」

「言つてないよそんなこと。僕も死にたくないもん」

「魔王バラモスなんて倒せるわけ無いだろ！…だから俺達は現実を忘れる為に、酒を飲み憂さを晴らしてんだ…」

静まりかえり俯く自称冒険者達の中を搔き分ける様に一人の人影がアルルとリュカの前へやつて来た。

二人のうち一人は少女で、身長は170に満たない僧侶風の美少女。もう一人は少年で、身長は更に低く160あるかないかの魔道士風の美少年。

「お、俺はウルフ。まだ駆け出しだけど魔法使いだ！」

「あの、私はハツキです。その…見習いですが僧侶として頑張ります。」

「俺達、絶対足手纏いにならないから連れていくてよ！」

「私達孤児なんです！バラモスを倒す為なら頑張ります！」

ハツキはアルルと同年齢…ウルフは更に2・3歳年下であろう…

二人の真剣な眼差しがリュカに襲いかかる。

「僕に言わないで！僕に決定権は無いから…アルルに言つて…」

リュカはたじろぎアルルに丸投げする。

アルルは少し引いたものの、笑顔で快諾。

奇妙なバランスの4人パーティが結成された…

<アリアハン近郊>

「なあなあ！アンタ職業は何なんだ？さつき大男を吹っ飛ばしてたし、やつぱり戦士なのか！？」

好奇心旺盛の少年ウルフが、リュカを質問攻めにしている。まだ城下を出て、それ程経過はしていない…

「さつきの大男の事なら誤解だよ。僕はあの人を吹っ飛ばしてないよ。振り下ろされた斧を掲んだら、放せつて言つから放したんだ！そしたら勝手に吹っ飛んだ！」

リュカは嫌がることなく優しく話しかける。

「それに職業って何？今は見ての通りしがない旅人だけど…」

「え！？リュカさんは職業の事を知らないんですか？」

思わずハツキが質問する。

「リュカはこの世界の住人じゃないのよ！」

堪らずアルルが二人に説明をしてあげる。

・

「へー！じゃあアンタ別の世界から来たんだ！？」

「別の世界つて…何だか不思議ですね…」

ウルフとハツキがそれぞれ感想を述べる…

「あんまここと変わんないよ！」

「じゃあアンタ職業は決まってないのか！？以前は何してたんだ？」

「うん。以前は王様でした」

「アンタ馬鹿なのか？そう言う[冗談は面白くないんだよ…」

「さつきから気になつてたんだけじゃあ…止めてくれない…それ…」

「え！？何？」

「僕、きっと多分ウルフより年上のはずだと思つんだよね」

「自身持つてくれ、100%年上だから」

「うん。じゃあ、『アンタ』って呼ぶの止めて！僕『リュカ』って名前があるからさー！」

「あ！ごめんなさい。リュカさん！」

慌てて謝罪をするウルフに、怒る風でもなく優しく微笑み頭を撫でるリュカ…

しかし、ゆつたりとした雰囲気は長続きはしない！

アルル達の前に3匹のモンスターが立ちふさがる。

青く半透明なゼリー状のモンスター…スライムである！

アルルは直ぐさま銅の剣を抜き放ち1匹のスライムAへと斬りかかる！

ハツキは手にしたこん棒を振りかぶり、飛びかかってきたスライムB目掛け打ち下ろす！

ウルフはメラを唱え、スライムCへ打ち放つ…が、命中したもののトドメは刺せず、スライムCは手近にいたアルルへ襲いかかる！スライムAを倒したばかりのアルルは隙だらけで、スライムCの攻撃をまともに食らってしまった！

「きやーーー！」

とは言え多少はメラが効いてたらしく、スライムCの攻撃は大事には至らず、アルルは手の甲を擦り剥いただけで即座に体勢を立て直した。

そして一閃！

最後のスライムをアルルは倒し戦闘は終了する。

「アルルさん！大丈夫！」

ハツキは慌てて近寄りホイミを唱えて傷を癒した。

「ありがとう、ハツキ」

「ごめん！俺がメラをもつとしつかり当てていれば…」

ウルフは申し訳無さそうにアルルに近付き謝罪する。

「そんな事ないよ。ウルフのメラはちゃんと当たつてたわよー！あのスライムがタフだつただけよ！気にしないのー！」うやつてチームプレイで倒したんだから！

みんな互いの健闘を称えあつてゐる…一人を除いて。

「リュカさん…何やつてんの？」

倒したスライムが消え去つた跡に落ちてある「ゴールドを拾い集めり  
ユカは爽やかな笑顔で報告する。

「スライム3匹で6ゴールド！僕の居た世界より倍だよ！」

戦闘に参加せず「ゴールドを広い漁るリュカに、何も言えなくなる3  
人であつた：

旅は道連れ（後書き）

これでいいのだ！

反対の賛成の人は居るのかな？  
ワシは魔王なのだ！

＜アリアハン近郊＞

アルル一行はアリアハンより北に位置する『レーベ』を目指し進んで行く。

途中、スライム、大カラス、一角ウサギなどのモンスターに襲われ戦闘を余儀なくされる！

アルル、ハツキ、ウルフは傷付きながらも勝利を重ね、この新米パーティーの戦い方を実践を持つて学んで行く。

そして日は傾き黄昏が空を覆う頃、パーティーリーダーの少女が言葉を発した。

「つて言つかりュカさん！ 貴方も戦つて下さい！」

そうなのだ！

4人パーティーにも拘わらず戦闘を行つてているのは3人…

リュカは戦闘に加わる意志すら見せていない。

「え〜！ 僕、争いごと嫌いなんだよねえ〜…」

「好き嫌いじゃないんだよ！ 僕達チームなんだからさあ…リュカさんは強いんだろ…一緒に戦つてよ！」

「僕、強くないよ！『勇者』とかそんな大層なもんじゃないし…でも逃げ足には自身があるから、ヤバくなつたらみんなを抱いで逃げ出すよ！」

右手の親指を立てて爽やかな笑顔で答えるリュカ…

二人の少女はリュカの笑顔に魅了され顔を赤く染め上げる。

夕日に照らされてなければ気付かれていたであろう…

「それよりさあ…もう日が暮れるよ！ 一旦町へ戻るつよ…」

「何言つてんだよ！ 早くバラモスを倒して平和な世界にしなきや…！」

「イヤイヤーー！今日は冒険初日だしわ…そんなに慌てても失敗しちゃうよ」

「そつよウルフー！リュカさんの言つ通りよー！今日は一回アリアハンへ帰りましょー！」

「ハ…ハツキまで…」

世の中、女性の意見は採用されやすい。  
そして少女の心を魅了したリュカの意見は採用される。  
ウルフは少しふて腐れながらも、姉的存在のハツキに従ってしまうのである…

実のところアルル達は町からそれ程離れてはいない。  
町を出たのが遅かった事もあるが、冒険初心者の為進行が遅いのである。

◀アリアハン▶

日も沈み殆どの商店が店じまいをした頃、アルル達はアリアハンの城下町へ帰り着いた。

「私の家はすぐそこなのよ。あんまり広くはないけれど、みんなが寝泊まりする事は出来るから…きっとお母さんも喜んでくれるわー！」  
アルルが階を自宅へ誘う中、リュカは足を止めアルルの提案を拒否する。

「あ…僕は町の宿屋に泊まるよー！」

「何でよ！？そりや、大したお持てなしは出来ないけど…わざわざ宿代を払う事ないでしょ！？遠慮はしないでよ！私達仲間でしょ！」  
アルルは今までに出会った事のない、この魅力的な男性と少しでも一緒に居たく、必死に我が家への宿泊を薦める。

「分かつた分かつた…正直言うとね、町で女の子ナンパしてから宿屋へ泊まるつもりなんだ！」

「え…ちょ…な、何考えてんのー？？」

ハツキもウルフも頷き呆れる。

「明日から本格的に旅立つのかよ！今日はゆっくり休んで英気を養わなければならぬのに！そんなの…ダメよ…！」

「うん。それは大丈夫！僕、戦闘しないから！」

言い切るリュカ。

「戦闘はしろよ！」

突つ込むウルフ。

「ともかくダメなものはダメ！」

「そうよ！ナンパなんてダメです！」

我が儘なアルルとハツキ。

「うーん…困つたなあ…」

リュカは悩み、そしてアルルに質問する。

「じゃあさ、一つ聞くけど…アルルのお母さんて美人？」

「…………宿屋へ泊まって下さい！！！」

そしてリュカは夜の町へと消えて行く…

日も昇り、一人別行動の仲間を迎えて宿屋まで赴く3人の若者達。昨晩この宿屋に泊まつた客は一人だつた為、迷うことなく目的の客室を見つける事が出来た3人。

しかしアルル達3人は、リュカが居るであろう客室の前で躊躇い戸惑っている。

理由は…聞こえるからである！

安普請の宿屋な為、客室内の音がだだ漏れなのだ！

そして、その客室内からはベットの軋む音と女性の喘ぐ声が聞こえてくる…

「何…あの人！？本当に女ナンパして部屋に連れ込んだの？」

呆れる少女一人とは別に、リュカの行いに怒りを感じる少年。

真面目な旅であるにも拘わらず、常に不真面目な大人のリュカが腹

立たしく思い、思わず客室の扉を勢い良く叩き開けるウルフ！

「アンタいい加減にしろ……よ……!?」

一言で言つと、竜頭蛇尾。

ウルフは威勢良く怒鳴つたのに尻つぼみで言葉をなくしていつた。

そしてリュカの上で裸で腰を振る一人の女性

カルフと女性は頭が合へないに硬直する。

「シ、シスター・ミカエル

絞り出す様にウルフが呟いた

「那不是——！！！！！」

室内に響き渡るシ

# 荒てて扉を閉めるウルフ！

それから1時間

ウルフは茫然自失で喋る事が出来ない。

アルルはシスター・ミカエルの事をハツキから聞く事に…

シスター・ミカエルはアリアハンの教会で勤めるシスター。

髪に三りくで長い一束に  
眼に青く肌に褐色  
少林が力で肌が不

教会が運営する孤児院で子供達に人気のシスターである。

卷之三

やつと服を纏い客室から出てきたリュカ。

その後ろから躊躇いながら出てくるシスター・ミカエル。

シヌタリ・ミカエルはハツキミカエルアに誰にも言わぬ様懇願する。

リニガは若者三人に先に外で待一様仮すとシスター・ミガエ川に

ギスをして一時の別れを告げる

—三ヵ月がん。またアリアハンに来る事があつたら貴方の元へ現

れてもいいかな？」

「はい。リュカさんに会える日を楽しみにしています」

そして二人は再度キスをして別れた。

このやり取りを物陰から覗く3人の若者。

「いやー…メンゴメンゴー・マジ僕の好みだつたからさあー…ちょー  
燃えちゃつてさー全然寝てないよー！」

シスター・ミカエルと別れたりュカはアルル達と会流し、ヘラヘラ  
状況を説明する。

「おいー！シスターとは何処で知り合つたんだよー…」

憧れの女性の閨事を目撃してしまつたウルフは、半ばハツ当たり氣  
味にリュカへ言葉を叩きつける。

「何言つてんのー？シスターに出会うには教会に行くしかないでし  
ょう？」

ウルフの怒氣を含んだ言葉に、不思議そうな顔で答えるリュカ  
「リュカさんは教会でシスター・ミカエルの事をナンパしたんです  
かー？」

シスター・ミカエルの事を知つてゐるハツキは信じる事が出来ず、  
思わずリュカに問いつめてしまつ。

「あ…あり得ない…あの真面目なシスター・ミカエルが…」

「ふざけんなよー！アンタ、シスター・ミカエルに何て事してんだ  
よー！シスターに謝れ！…謝れこのヤローーーー！」

「ふざけているのは君だー！ウルフ…」

ウルフの悲痛な叫びに穏やかに話しかけるリュカ。

「もし僕がミカエルさんを力任せにレイプしたのなら、ウルフの言  
い分は尤もだけど…僕は口説きはしたが、強制はしてない！今のウ  
ルフの言い分はミカエルさんの自由意志を軽視している事になる」  
リュカはウルフの目を真つ直ぐ見つめ優しく語り続ける。

「ミカエルさんは自由なんだよ…自分で考え、自分で決めて行動す  
る事が出来るんだよ。それを忘れちゃダメだよー！」

リュカに先程までのキャラクタはない。

だからこそウルフの憤りは大きくなる。

「うるさい！黙れよ！お前みたいなキャラクターが、シスター・ミ

カエルの事を偉そうに語るなよ！

そうリュカに吐き付けると、逃げ出す様に町の外へ出て行つてしまつた：

「ちょっと！一人で町の外に出でては危険よ！」

アルルの叫びも思春期の少年の心には届く事は無い…

まだ碌に冒険をしていない魔王討伐一行：

まともに冒険の旅は出来るのだろうか…？

青春の憤り（後書き）

やつひまつたよ、この男一  
じつすんだよ！

純真無垢な少年少女に悪影響だよ！  
なんでこんな奴が主役なんだよ！

＜アリアアハン近郊＞

ウルフは走る。

ひたすら走る。

逃げる様に走る。

いつたい何から逃げているのか…

旅の仲間からか…

憧れの女性を寝取った男からか…

それとも憧れの女性の自由意志を蔑ろにした自分からか…  
もう、何故走っているのか、何故逃げているのか分からぬでいる。  
そして…ここが何処かも…

気が付けばモンスターに囮まれていた！

大がらすや一角ウサギ、そしてオオアリクイに…

ウルフは慌ててメラを唱える！

メラは一角ウサギに命中！

しかし隙を突かれオオアリクイの爪がウルフの腕を切り裂く！

あまりの激痛にその場に倒れ込むウルフ…

そしてウルフ目掛け突撃してくる大がらす！

何とか身を捩り大がらすの攻撃をかわす！

直後、一角ウサギの角がウルフの太腿に突き刺さる！

ウルフは死の恐怖を憶えた。

自分一人では戦う事も逃げ出す事も出来ない…

大がらすが再度ウルフの瞳目掛け突撃をしてくる！

今度は避けられない…

死ぬ！そう思つた瞬間！

「バギ」

強烈なつむじ風が巻き起<sup>ハ</sup>り、真空の刃がモンスター達を切り裂いてゆく！

「ふう…間に合って良かった」

声のする方を見ると、優しい表情のリュカが近付いてくる。

「……今の…アンタがやつたのか…？」

「まあ、一応…」

リュカはウルフの側にしゃがみ込むと腕と足の傷の具合を確認する。

「リュカさんて魔法使えたんですか！？」

リュカの後ろから現れたアルルが驚き質問する。

「うーん…まあ、一応…」

ウルフはリュカから目が離せないでいた。

リュカのバギはウルフが知っている…見た事があるバギとは桁が違つていた…

「ベホイミ

ウルフの傷が完全に治る。

痛みも跡も残らずに！

「べ、ベホイミって高度な治癒魔法じゃないですか…？そんな魔法まで使えるんですか！？」

更に追いついたハツキも驚きを隠せないでいる。

「え…と…まあ、一応…調子が良ければ…？」

森を出て街道に戻り、一旦落ち着いた一行は一斉にリュカへ質問をぶつける！

「何であんなに威力のあるバギを使えるんだ…？」「何で魔法を使える事を黙つてたの…？」「僧侶でも相当修行を積まないと使えないベホイミを何で使えるんですか…？」

等々…

「落ち着いてみんな…一人ずつ答えるから」

「じゃあ俺の質問。リュカのバギは威力が凄すぎる…何で…？」

「分かりません…次、アルル」

「何で魔法使える事黙つてたの？」

「言つたら戦闘に参加しろつて言われるからー絶対参加したくないもん！次、ハツキ」

「ベホイミつてかなり修行しないと使えないと思います。どうして使えるんですか？」

「気付いたら使えてた！以上、質問タイム終わり！－」

リュカは強制的に質問を打ち切る。

「ちょっと勝手「そんな事よりウルフ！－」

真剣な瞳に切り替わるリュカ。

「ウルフ！一人で町の外に出たら危ないだろーアルルもハツキも心配したんだぞ！」

「う、そ、それは…だつて…あの…」

リュカは少し屈みウルフと同じ田線で見つめ続ける。

「……ごめんなさい……」

「うん。良い子だ！」

リュカはウルフの頭を少し乱暴に撫でる。

本来ウルフは子供扱いをされるのが大嫌いであるのだが、相手がリュカだと何故か怒りが湧いてこないのである。

「ごめんな…ウルフ…ミカエルさんに惚れてるなんて知らなかつたからさあ…」

「い、いや…そ、そんな…惚れてるつて言うか…その…」

ウルフは顔を真つ赤にして俯く…

そして、それを年上の女性一人がニヤけながら見守る。

「僕にも経験があるんだ…憧れてた女性の閨事を目撃しちゃつた事が…」

「本当に…？」

若者3人は、思春期特有の興味心からリュカの話に耳を傾ける。

「僕が幼い頃住んでいた村に、フレアさんと言つものつそい美人のシスターが居たんだ。でもある日フレアさんと見知らぬ男が、物置小屋でエッチしている所を見ちゃつてね…ショックだったなあ…」

「それで…リュカさんはどうしたの？」

まさに同じシチュエーションのウルフは、心のモヤモヤを打ち払い  
たいが為に続きを急かす。

「ん 男の方は在でもふーにでやん」と思って後を付いたんだけど、見失つちやつてさ… それ以来そのヤローには会つた事ないよ」

「最初は『井井』へ、次に『余所余所』へ、ついで『

110

え!? シスターの方か謝つちやつたの?」

を傷つけてしまったんだ…フレアさんは何も悪くないのに…

しくなる思いで聞き入っていた。

を見せてはダメだよ」

『そうか…シスター・ミカエルはリュカさんの優しさを一目で見抜いたんだ…だから好きになっちゃたんだ…俺もリュカさんみたいな男になれる様頑張ろう！』

ウルフは多少の誤解を脳内で補正し、リュカを目標の男へと昇華させてしまった。

果たしてウルフに幸せは訪れるのでしょうか……？

昨日とは違い、戦闘（リュカ抜き戦闘）にも慣れてきた一行は日が暮れてしまつた事もあり、野営の準備を行つてゐる。  
戦闘以外の事となると俄然張り切る男リュカ…伊達に幼少期より旅慣れしてきた訳ではなく、テキパキと野営の準備を進めて行く。

野営などした事のない若者3人は、ただ呆然と見続ける事しか出来ず、アルルは思わず…

「戦闘も張り切つて戦つてくれると助かるのだけど…」

まあ…言うだけ無駄であるが…

全ての準備が整い、焚き火を囲い食事を始める。

そして今更ながらリュカが疑問を口にした。

「ところでさ…今、何処に向かつてるの?」

「言つたでしょ！レーべよ」

「そこに何があるの?」

「…………リュカさん…私達の旅の目的を理解してる?」

「う~ん…概ね…」

ほぼ理解してないリュカにアルルが優しく説明をしてくれた。

「私達は魔王バラモスが何処に居るのか分かつてません。ですから、世界中を旅してバラモスの居場所を探し出そうと思つてます。その為にはこのアリアハン大陸から出なければなりません。そしてこの大陸の東に『いざないの洞窟』があります。その奥にはロマリア大陸に繋がる『旅の扉』があります。いま、そこを田指してます」

「へー…じゃ何でレーべに行くの?」

「アリアハン城からいざないの洞窟まで戦闘をしなくても1週間はかかります。その間ずっと野宿はイヤでしょう?だから立ち寄るんです」

「そつか…レーべには…美人が居るかな?」

『ここに居るじゃない!』

アルルは叫びそうになりながらも冷静な瞳で見据える事で大惨事を回避する事が出来た。

そして夜は更け、各々眠りの体勢に入る。

アルルとハツキはリュカが、寝ている自分の側に来るのではないかと期待を持つて横になつた為、この晩は一睡もする事が出来なかつたらしい…

果たして一人の乙女が、女に変身する日は来るのだろうか…  
そして、その担い手は…

## レーべ

〈レーべ〉

アリアハンの城下町を出て3日。夕方と呼ばれるにはまだ早い時間、アリアハン大陸にある小さな村『レーべ』に一行は到着した。

レーべ…この村には目を引く大きな建物も、人々が集まる酒場も無い、極めて質素な村…それがレーべである。

アルル一行はひとまず宿を確保してから村内を見回り出す。若者3人が、武器屋や道具屋を見て今後の旅に必要な物を購入している中、若干1名は若い村娘をナンパする為、さほど広くない村を探索し歩いている。

「何であの人なんに元気なの…？」

「俺が知るかよ！アルルの方が付き合いは長いんだろ！」  
「数時間の差よ！」

リュカのバイタリティに疲れ切った3人は、早々に宿屋へ戻り旅の疲れを取り去る事に専念した。

翌朝…

まだ人々が起き出さない時間に、目が覚めてしまったアルルは、外の空気を吸いに宿屋から近くの広場まで散歩に出かける。

そこで見た物は…朝靄の中佇む一人の青年の姿だつた…

紫のターバンを巻くその青年は、広場の中央に佇み周囲に寄つてきた小鳥達と楽しそうに会話をしている。

その幻想的な光景に見入っていた少女に気付いた青年は、優しく微

笑み少女に語りかける。

「やあ。おはようアルル。今日も可愛いね」

「お、おはようリュカさん…早起きなのね」

アルルも分かつてはいるのだ！

リュカにとつて『可愛いね』や『キレイだね』は日常挨拶の内なのだと…

それでもこの素敵な青年に、素敵な笑顔で言わわれると期待をしてしま…その言葉の裏を…

アルルはまだ出会つて数日のリュカにどうしようもない恋心を抱いてしまつて…

少しでもリュカと一緒にいたい…一緒に会話をしたい…そう思つも、これまで年頃の女の子としての生き方をしてこなかつた為、何をしたいのか、何を話せばいいのか分からぬのである。

そして永遠とも思える沈黙の後、絞り出した言葉が…

「リュカさん！私に剣の稽古をつけて下さい…」

である。

その日から早朝…可能な限り…アルルとリュカは手合わせをする事となつた。

無論、リュカは最初は断つたのだが…アルルの若さ溢れる気迫と、リュカ元来の面倒見の良い性格から、済し崩し的に了承してしまつたのである。

キン！ガツ！キン、キン！ガツッ…！

小さな村に早朝から響き渡る金属音。

アルルの銅の剣と、リュカのドラゴンの杖とがぶつかり合つ音。

状況は素人が見ても一目瞭然。

リュカの圧勝である。

全力で打ち込むアルルに対し、涼しげな表情で全てを去なすリュカ…

「はあ、はあ、はあ…」

両膝に両手を乗せ肩で息をするアルル。

「今日はもういいだろ？疲れちゃったよ」

疲れるどころか汗一つかいてないリュカ。

「「するい」」

そして二人の手合わせを見つめ、不平を言うハツキとウルフ。

「アルルだけズルイです！私もリュカさんと手合わせしたいです」

「俺も！」

「ちょ、僕もう疲れたから…あ、明日からね…明日の朝からにしようよ！」

結局、パーティー全員と朝の特訓をする事になつたりュカである。

＜アリアハン大陸＞

一行は東に位置するいざないの洞窟を田指しレーべを出立する。途中、何度もモンスターの襲撃に会い、戦闘を繰り返す。無論、3人で…

しかし3人共理解し始めていた…リュカの圧倒的な強さを…そしてリュカの強さに頼る事の恐ろしさを…

魔王討伐を目的とするアルル達にとって、リュカ一人に依存しては強敵を相手にした時にパーティーとして戦闘が出来なくなるのではないかと言う事の恐ろしさを…だが…同時に安心もしている。

本当に危険に陥つた時はリュカが助けてくれるであろうと…根拠はないが3人共、そう信じているのである。

毎度の如く、野営の準備になると張り切るリュカ。

しかし若者3人も手慣れたもので、薪を集めたり食事の準備をしたり、冒険者として成長していってる。

そして手慣れてくると生まれるのが余裕で、余裕が出来ると会話も

弾む。

アルル同様、異性として惹かれていたハツキがリュカへの質問を開始する。

「そう言えばリコさん、以前お話ししてた憧れのシスターとは、結婚を考えているのですか？」

ハツキとしては、意中の男性がフリーであるかを確認する為の質問であるが、当のリコ力からしてはそんな意識は微塵もなく、また質問者の少女は自分の娘と同年代の為、それ程深い意味があるとは考えず自身の事を語り出す。

「いや！ フレアさんは結婚を考えてないなあ……幸せにしてあけた  
いけど……僕、奥さんの事愛してるからー！」

「ん すんこい美人だよ！未だに彼女以上の美人は出会った事ないから！」

「な、何事ーー！」

「は、はい！ 結婚してました！ 子供も居ます！」

「い、子供まで…」

ガツクリと頃垂れる少女一人。

「何だよー結婚してゐるのにシスター・ミカエルに手を出したのかよ！」

「おいおい、ウルフ君！お子ちゃまみたいな事言うなよ！僕はこの世界に単身で飛ばされたんだ。従つてこの世界に僕の奥さんは居ないのだ！つまり、フリーダム！！」

本来、この様な発言は最上級のダン引き魔法に類するのであるが、恋は盲目と言いますか…

この世界ではフリー……

と言ひ、我欲丸出しの思考に到達してしまつた少女一人。

「じゃ、じゃあ…もし元の世界へ戻れなかつた場合は、この世界で  
新たな家庭を築くつもりですか？」

アルルの希望を込めた質問に…

「イヤ…帰れない事は無いと思うよ…なんだかんだ言つても僕の周  
りの人々が躍起になつて僕を連れ戻そつと画策するだらうから…僕  
の周囲には結構凄い人々が居るからね！」

リュカの答えにかえつて闘志を燃やす少女一人。

そんな空氣を読めない男一人は、リュカの思いで話で盛り上がる。

「……………でね、ブサンはね…………」

そして夜は更ける。

アルルとハツキはどのようにリュカの心を掴むのか…

あのチャラい男の心を掴む事が出来るのか…

……………ムリっぽくない？

## レーべ（後書き）

一応アルル達の装備を紹介します。

アルル

銅の剣

旅人の服

ハツキ

こん棒

旅人の服

ウルフ

檜の棒

布の服

リュカ

ドラゴンの杖

王者のマント

アレ？

紹介する程じゃなかつたね。

こう言うの不要ですか？

## 行き止まり

「いざないの洞窟」

小さな湖の畔にいざないの洞窟への入口は存在した。アルル達は警戒しつつも洞窟内部へ下りて行く。暫く進むと何もない行き止まりの空間に出た。

そして、そこには一人の老人が…

「あの…お爺さん。この洞窟には他の大陸に抜ける事の出来る『旅の扉』があると聞いて来たんですけど…それは何処ですか？」

アルルが躊躇いがちに訪ねると…

「お前さん方…『魔法の玉』はお持ちかな？持つてないのであれば、これより先へは進めんよ。出直してきなさい」

「あ、あの！魔法の玉って何ですか？」

「…ふう…そんな事も知らんでここまで来たのか…」

『ムカー！…何なのこの爺は！人が下手に出てりやつけ上がりやがつて！』

「あ！僕、聞いた事あるよ。確かレーべにある様な話だった…かな？」

アルルが老人に対して暴言を吐き出す直前、リュカが遮り話を始める。

「リュカさんは何でそんな情報を持つてるんですか？」

「うん。レーべで女の子をナンパしてたら教えてくれた。でも『僕の玉の方が凄いんだよ』なんて事言つてたので、詳しい事は知らない」

一行はリュカの言葉を信じ、取り敢えず洞窟を後にする。

洞窟を出た所でアルル達は多数のモンスターに囲まれてしまった。バブルスライム3匹、魔法使い4体、サソリ蜂3匹…

「ぐつ！ ちょっと数が多いわね！」

「愚痴つてもしょうがないだろ！ ともかくやるしかない！」

「バブルスライムは私が『ニフラム』で何とかしますから、他をお願いします！」

「じゃあ、私が魔法使いでウルフがサソリ蜂ね… いける？」  
「やるしかないだ「魔法使いは僕が相手をしよう」

「え！？」

普段、戦闘に参加しないリュカが自ら戦いを申し出た！  
つまりそれ程この状況はピンチなのである！

「ほら！ 采けてないで… 行くぞ！」

慌てて各自の相手に攻撃を開始する。

ウルフが新たに憶えた魔法、ヒヤドで1匹のサソリ蜂を凍り漬けにすると、アルルが直ぐさま2匹のサソリ蜂を切り倒す。

ハツキもまた、憶えたてのニフラムでバブルスライムを消し去る。  
その間、時間にして1分弱…

各自の相手を倒しリュカの戦闘を見学しようと振り向くと、戦闘前と同じ状況で立っているリュカが…

しかし、魔法使い4体は既に倒されていた…

『いい、いつの間に… リュカさん、強すぎて参考にならない…』

3人共、全てではないにしろ戦闘中リュカの動きに注意をしていたのに、戦った痕跡を残さぬまま4体もの敵を瞬殺してしまったリュカに驚きを隠せない。

「さあ… 一旦レーベに戻るんでしょう？ 誰かルーラとか使える人居る？」

「ル、ルーラなんて高位魔法、使える訳ないよ！ それにルーラは術者一人しか移動出来ないんだから！」

ウルフが少しの憤慨を込めて説明してくれる。

リュカの居た世界ではロストスペルであつたルーラだが、この世界では普通に存在する様だ…

しかし、かなりの修練を積んだ者にしか習得できない高位魔法で、

基本的には術者のみの有効範囲らしい…

「じゃ、サクサク行きますか！レーべまで5日くらいかかるし…」

5日という具体的な数字に、げんなりする若者3人…

アルルは情報収集の大切さを骨身に染みて理解する事となつた…

〈レーべ〉

辺りが暗闇に覆われる頃、アルル一行はレーべに到着した。

早速宿の確保に向かつたのだが、生憎部屋が埋まつていて大部屋を1つしか確保出来なかつた。

兎に角疲れを癒したアルル達は大部屋で了承。

部屋に着くなり深い眠りに旅立つた……リュカ以外は…

朝、アルルが目を覚ますと…リュカが居ない！

また外で小鳥と戯れているのかと思い広場へと向かつ。しかし居ない…

村内を見回ると村外から帰つてくるリュカを発見する。

「リュカさん、何処行つてたんですか！」

慌てて近寄り声をかける。

少し驚いた表情をするリュカ。

そしてリュカからは微かに女性物の香水の香りが…

「ちょ、ちょっとそこまでお散歩？」

『散歩な訳ない！きっと女と会つていたのよ…でも何処で？村の外に居るの？いえ、考えられない…じゃあ何処で？きっと聞いても答えないだろうなあ…』

腑に落ちない点も多々あるが、アルル達は朝の鍛錬を終え村内で情報収集をする。

程なく魔法の玉を制作していると言う老人の家を突き止めた。

向かう一行：

コンコン

アルルは丁寧にノックをして住人を呼び出す……が、出てこない。

「留守……かしら？」

「いや……気配はするよ。人嫌いって言われてたからね……居留守だよ！」

ゴンゴンゴン

今度はリュカが力任せにノックする。

「おい、爺！居んのは分かつてんだ！大人しく出てこい！出てこないとドアぶち破つて乗り込むぞ！」

ゴンゴンゴンゴン……ガチャリ！

鍵が開く音と共にドアが開き老人が顔を出す。

「やかましい……いつたい何の用じゃ……用が無いなら帰れ……！」

「痴呆症ですか？用があるからノックしたんです。用が無ければこんな爺の面など見たくない」

この間、リュカの表情はいつも通りの優しい微笑み……若者3人はあからさまに引いている。

「……で、何用じや！」

「うん。魔法の玉を頂戴」

「何で見ず知らずのお前等に魔法の玉をやらにやならんのだ！」

リュカと老人の険悪なムードは続く……（老人の一方的な険悪ぶりですが）

「魔王バラモスを倒す為には必要なんです。お願ひします、ご老人！」

堪らずアルルが口を挟む。

「ふん！お前等なんぞにバラモスが倒せるのか！？無駄な事に儂の発明品を渡すつもりはない！」

「そんなのやつてみなければ分からぬだろー最初から諦める奴は嫌いだ！」

長い沈黙が続く……

「良いじやろ……交換条件を達成したら魔法の玉をくれてやる」

「あ、ありがとうござります！」

「例を言つのはまだ早い！達成してからにせい！」

「んで、条件つて？」

「儂はな『盗賊の鍵』という物を作ったのだが、『バコタ』という盗賊に盗まれてしまったのだ。それを取り返してこい！この玄関もその鍵で開く！取り返したのなら勝手に入つて来るが良い！その時は魔法の玉をくれてやる」

バタン！ガチャリ！

一方的に条件を言つて、また引きこもる老人。

「勝手だなあ～」

## 行き止まり（後書き）

あちゃ 「今日はリュカさんに質問です。何でルーラを使える事を黙っていたのですか？」

リュカ 「だつて言つたら良い様に利用されるじやん…ちよーめんどくせーじゃん！タクシージャねえつーの…！」

あちゃ 「はい。基本、自分の能力を明かさないめんどくさがりやの主人公、リュカさんでした！」

では、次話もお楽しみに！

## 空白の一晩（前書き）

今作品での勝手に設定。

ルーラ及びキメラの翼は、使用者単体に効果がある魔法（アイテム）です。

ですので、4人がキメラの翼で移動する場合、キメラの翼が4つ必要になります。

今後そのつもりでお読み下さい。

## 空白の一晩

〈レーベ〉

アルル達は宿屋へ戻り作戦会議を行つてゐる。

「さて、何とか魔法の玉の所在を掴んだけど…今度はバコタね！」  
アルルが切り出す。

「バコタって言えば、アリアハンで名を轟かす盜賊だろ…捕まえるのは難しくないか？何処にいるのかも分からんし…」  
ウルフが溜息混じりで意見を言つ。

「バコタならアリアハン城の牢屋に居るよ」  
リュカが状況打開の一言を発する。

「…な、何でそれを知つてるの！？」

驚き詰め寄る3人：

「まあまあ…さつさとアリアハンへ行こつよーほら、『キメラの翼』  
も用意しておいたから」

アルル達は納得しきれないま、リュカに促されアリアハンへと舞い戻る。

〈アリアハン〉

一行はアリアハン城下を城に向かい歩いて行く。  
すると前方からうら若いシスターが一人駆け足で近付いてくる…胸を盛大に揺らしながら…

「あ！シスター・ミカエル！」

嬉しそうに声を上げるのはウルフ。

しかしシスターはリュカに抱き付き話し出す。

「リュカさん！昨晩はありがとうございました。それと…楽しかつた

です……」

シスターは頬を赤らめ語り出す。

不満顔のウルフ。

シスターからは、今朝リュカから漂ってきたのと同じ香水の香りが……  
『まさか……わざわざキメラの翼を使ってアリアハンへ戻つてたの？  
キメラの翼だつて、ただじやないのよ……でもおかげでバコタ  
の情報が手に入つたし……でも……』

やはり納得のいかない3人を伴い、シスターと別れ城の地下牢へと  
向かうリュカ。

「あ……！テメーは昨日の晩の……！テメーのせいで掘まつちまつたじ  
やねえーか！」

リュカは鉄格子越しにバコタと対面する。

「何言つてんだよ！ミカエルさんの財布をスつたのが悪いんだろ！  
どうやらリュカは、昨晩シスター・ミカエルとデーター中にバコタと  
遭遇し、財布を盗む現場を押された様である。

「まあいい……そんな事より、盗賊の鍵を返してよ。本来の持ち主か  
ら依頼を受けたんだ！」

「あ、？ 盗賊の鍵？……ああ……アレなら『ナジミの塔』の爺に騙  
し取られたよ！」

「ナジミの塔？なんだそれは？馴染みの店みたいなもんか？行きつけか？……じゃあ、その店の場所を教えるよ！」

「店の名前じやねえよ馬鹿！そう言つ名前の塔があるんだよ！  
「変な名前！バコタの次くらいに変な名前！……」

「つるせーよ！サッサと行けよ！そして死ね！」

「なんだ？悪い事して掘まつたクセに、反省の色が見えないぞ！お  
仕置きしちゃる！」

そう言つとリュカは鉄格子の隙間から左手を入れバコタに向かって  
魔法を唱える。

「バギ」

ヒュウ、ドゴー！

「つじつ……！」

リュカから発せられたバギには殺傷能力は無い、強力な風の固まりがバコタにぶち当たつた！

「ほ〜れ、バギ、バギ、バギ！」

「がはつ……」ほつ……ちょ、『めんなさい』も、止めて……「つじつ……！」

「うん。勘弁してあげる。悪い事したら反省するのが常識だからね！もうダメだよ、悪い事しちゃ」

「凄い……魔法を改造しちゃつた……」

只今バギの魔法を懸命に修練中のハツキは、リュカの魔法の才能に心底憧れ、恋心と合わさり、とんでもない感情へと変化し始める…

大変危険な兆候です！

「んで……そのナジミの塔って何処にあんの？」

「は、はい……アリアハンの西の小島に……あ！でも大丈夫です！更に西の岬に洞窟があつて、そこからナジミの塔へは繋がつてます！」

「うん。ありがとう。じゃあ、僕達行くね。もう悪い事しちゃダメだよ。出所したら、全うに生きるんだよ」

リュカのバギが堪えたのだろう低姿勢なバコタの情報を元に、件の洞窟を目指すアルル一行。

＜ナジミの塔への洞窟＞

ジメジメと嫌な雰囲気を放つ洞窟を、度重なる戦闘に勝利しながら突き進む一行。

イヤ……言い直そう……度重なる戦闘に勝利する3人と戦闘をしない1人の一行…

更に言えば戦闘しないだけではなく、終始歌を歌いモンスターを呼び寄せるリュカ！因みに曲題は『YOUNG MAN』である！

「ちょ、戦闘しないのはいいとしてもさ、歌うのは止めてよー。」

肩で息するウルフの悲痛な叫び。

「あはははー！以前、息子にも同じ事言われたー！」

「息子さんも苦労してるんですね…」

「でもさ…若い内の苦労は買つてもしらつて言つひじゃんー良いんじゃね？」

本人が聞いたら間違いなく激怒するであろう発言をするリュカ。

会つた事もないリュカの息子に、心底同情するウルフ。

「じゃあ…そこまで言つリュカさんは、どんな苦労をしてきたんですか？」

単に歌われるより静かに語らせておく方がマシと思つたアルルの発言は、思わぬ重い話を引き出す結果へと繋がつた。

リュカの幼少期の苦労話…

目の前で父親を…自分が人質になつた為殺された話から奴隸時代の10年間…

口調は軽く、爽やかに話すものの、洞窟内と言つ雰囲気と話の内容がマッチしてしまい、号泣し始める3人…

アルルにしては、幼い頃より同年代の女の子と遊ぶ事も許されず、勇者としての重荷を背負わされ、この世で最も不幸だと思っていた…ハツキとウルフも同様に、幼い頃から孤児院で生きてきた自分はかなりの不幸だと思いこんでいたのである。

しかし、それでも…親を目の前で殺された事も無ければ、鞭で打たれ過酷な労働を強要された事も無い。

果たしてリュカと同じ人生を過ごしたら、リュカと同じように明るく爽やかな性格になつていたであろうか？

そう思つた時、リュカに対する尊敬の度合いが飛躍的に上昇してしまつ若者達…

道を踏み外す事の無いよう祈りたいものである…

## 空白の一晩（後書き）

ルーラ&キメラの翼の件…  
クレーム等は受け付けません。  
容認をお願いします。  
だって…ルーラはともかくとして、キメラの翼つて都合良すぎなん  
ですよ！  
安価であんな凄い能力つて…  
困るんですよ！

## ナジミの塔

ナジミの塔

リュカの過去話に目を真っ赤に腫らす程泣いてしまつた若者3人と、そんな事気にもせず歌いまくりモンスターを寄せまくるリュカ達の一行は、洞窟を抜けナジミの塔の1階まで到達する事が出来た…半日以上使って…

せる事に意見は一致した。

「ううん、何處か身を寄せで休める所は無いかな？」

二  
行  
<

すると、また地下へと下りる階段があり、その先から人の気配が漂つてくる。

ユ力は3人を抱き抱えるように連れ込んだ。

卷之三

人

は」やかな彦で、「三才運の到来を歓迎する

「ナニの御用事ですか？」

迎だ！」

矢羽を承知で聞きはるが、何でけんかの用で絶言を

「銀一郎殿、おめでたー！」

ミスター・ミレスが貴様は！と語り、ぐぐぐと我慢する力。

「此處ならライバル店もなくて良いと思つたんだけど…ライバル店  
どこのか客自体が居ないんだよね！盲点だつたよ」

『ヤバイ、コイツ馬鹿だ！まともに相手しない方がいい！』

「大変ですね…4人泊めてもれますか？」

「もちろんだとも！4人で8ゴールド。前払いでも良いかい？」

「食事は…期待しない方が良いですよね？」

「馬鹿にしちゃいけないよ！こう見えても若い頃は料理人を目指して修行したんだ！周りは海に囲まれていて、庭では野菜も作ってるんだ！私の料理だけを目当てに来る客も居るくらいなんだよ！」

『じゃあ普通に町で経営してもやつていけるだろに…』

「へー…じゃあ、食事付きでお願いします。…あと幾ら払えば？」

面倒事を嫌うリュカは突っ込まない。ただ流すのみである。

「大丈夫！宿泊料に入っているから」

ウインクする店主に苦笑いのリュカ

ともかくは疲れを癒す事が出来るのはありがたい…

思いがけずベットで睡眠をする事の出来たアルル達は、朝から元気にナジミの塔攻略へ出立。

「あの宿屋…料理の腕前は一級品だつたね」

リュカの感想に全員頷く。

「絶対、喰む場所…間違てるよね！」

またも全員頷く。

さて氣を取り直してナジミの塔攻略！

この塔は2階以上の階に外壁が存在せず、吹き曝しの空間が存在する。

強烈な海風吹き込むそのエリアは、大変危険で氣を抜くと外まで放

り出されそうになる。

3人共リュカにしがみつく様に塔内を移動していく。

「しかしハツキは結構胸が大きいね！今度、直に見せてもらいたいよ！」

リュカ以外の男性が発した言葉なら、間違いなくハツキの鉄拳が破裂していたであろう。（意外にハツキは腕力があるのだ！）

しかしリュカの発言となると対応が変わる。

更に体を押し付けリュカの腕に胸を押し当てる。

程なく風の吹き込まない空間へ入りアルルとウルフがリュカから離れる。

しかしハツキはリュカの腕にしがみついたまま離れない。

「……あの……ハツキさん？……離れて……」

「でも……リュカさん、オッパイ好きでしょ！？」

「うん。大好きだよ！でもね……今は歩きづらいから……離れて……」

そしてハツキも、泣々離れる……

リュカに責任は取れるのでしょうか？

『フロッガー』や『人面蝶』と言つたモンスター達と幾度も戦闘をし、アルル達は最上階へと到達した。

其処には一人の老人が……

狭いが整頓された綺麗な部屋……

老人が一人で暮らしているとはいえ、明るい内装の部屋。

リュカは思わず叫ぶ。

「何だ此処！何でこの塔は人気なんだ？そんなに暮らし易いのか？」  
「ふおふおふお……人嫌いの老人からすると暮らし易い事この上ないぞ！」

老人はリュカの発言に気分を害した風もなく、楽しそうに笑い出す。

「あの、ご老人……実は……」

アルルが意を決して老人に話しかける……が、

「これじゃろ！」

アルルの言葉を聞く前に、懐から一本の鍵を取り出しがアルルに見せる。

「儂は夢でお前さん達に盗賊の鍵を渡すのを見たんじや……ほれ、持つて行くが良い」

「ありがとうございます」

「うむ。礼はいい……早う世界を平和にしてくれ……」

アルルは力強く頷くと老人の元を後にする。

これで魔法の玉を入れれば、世界へ羽ばたく事が出来る！

打倒バラモスという目標へ近付く事が出来る！

アルル達の決意は強まった！

アルル、ハツキ、ウルフ、3人はそれぞれ強まった決意を胸に、塔を下りて行く…

リュカは…面倒事に首を突っ込んだ事に少々後悔をしている…何でこの男がもてるのか些か疑問である？

〈レーベ〉

バン！

「爺！約束通り盗賊の鍵を取り戻してきたぞー！玉よー！せー！」

勢い良くドアを叩き開け不躾に叫ぶリュカ…

「騒がしいのあー…ほれ、魔法の玉ならそここの箱の中に入つとる。勝手に持つて行け！」

そう言い顎で部屋の隅にある箱を刺す老人。

アルルは箱に近付き開けようとする…が、開かない！鍵がかかっている。

「あの！開かないんですが！」

「鍵がかかってたまじゃ開く訳が無からうー！開けて取り出せー！」

「…………あの…鍵は？」

「何じゃー？取り戻したんじゃ無いのか？それで開けてサッサと立

ち去れ！」

「ん？ ちょっと待て爺！ それじゃ 何か… ）の鍵が無かつたら魔法の玉を取り出す事が出来なかつたのか！？」

「それがどうした！？」

「だつたら最初から言えよ！ 『鍵を盗まれて魔法の玉を渡せないんですう～』 つて！」

「ふん… どつちでも同じじやろ… 魔法の玉も手に入つたんじや、 サッサと去れ！ 田障りじや！」

「）のクソ爺～… 言われんでも立ち去るわ、 ボケエ… ほれ、 鍵返すよ…」

リュカは老人の田の前に盗賊の鍵を晒す。

「いらんわ！ 元より世界を救う者達に渡すつもりで造つたんじや！ 持つてけ、 馬鹿ガキ共！」

「……爺さんアンタ……」

リュカに先程までの剣幕はなく、 老人を見つめる。

「もう用は無いじやろ… ）こんな所で時間を潰してないでサッサと世界を平和にして来い！」

アルル達は老人に追い出されるように家から出る。

「あのお爺さん… 結構良い人… みたいですね…」

ハツキの感想にリュカは、

「口が悪い、 ムカつく！」

そう少し笑いながら答える。

随分と回り道をしたが、 やつと魔法の玉を入手した一行。

これでいざないの洞窟の奥へ入る事が出来る… はず。

世界へ羽ばたける事を信じて、 今日はレーべの宿屋で疲れを癒す。

リュカを除いて…

… あの男は今夜もコツソリ、 アリアハンへ戻つていた…

そして夜は更け、 朝が到来する…



## ナジマの塔（後書き）

気が向いたのでアルル達の年齢を紹介します。

アルル 16歳

ハツキ 17歳

ウルフ 13歳

リュカ 25歳？（石化時代を加算すると33歳かな？）

ところで、アルル達の性格って、どんなのがしつくつありますか？

「こぎわないの洞窟」

かなりの時間を浪費して再度この行き止まりへと戻ってきたアルル。

此処で番をしているかの様に佇む老人に、魔法の玉を見せつけるアルル。

「どうよー今度は持つてきたわよー!」

「ふむ……では、魔法の玉を其処の壁にセットして玉から伸びる紐に火を点けなさい」

アルルは言われた通り壁に魔法の玉をセットする。

「火は俺が点けようか?」

ウルフが申し出るが、

「ううん、大丈夫よ!私もメラを憶えたから」

そう言いつとメラを唱えて火を点ける。

ジユ~~~~~

そしてリュカが何となく感づく。

「……なあ、爺さん……あの玉を使つた所を見た事はあるのか?」

「壁が崩れて無いだろう!今回が初めてだ!」

「……ヤバイ!!!!アルル、早く魔法の玉から離れろ!」

リュカは慌ててアルルに近付く!

そしてアルルの身体を抱き寄せ魔法の玉を背に蹲る!

「みんなも伏せろ!!!!!!」

ドガーンンンンン!!!!!!

強烈な爆発音が洞窟内へ響き渡る!

「み、みんな無事？」

耳鳴りが止まない状態のハツキが無事を確認する。

「お、俺は大丈夫…」

「儂も…大丈夫じゃ…」

そして尤も爆心地に近かつたリュカとアルルに視線を向ける…  
リュカはアルルに覆い被さるようにして動かない…

慌ててハツキとウルフは駆け寄る！

「大丈夫！？しつかりして！」

「わ、私は大丈夫…」

リュカの下にいるアルルが無事を告げる。  
そしてリュカもノッソリと起きあがる！

「…ふ…」

「…ふ？」

リュカが何かを言おうとしている…

「…ふ…ふざけんな！！何が魔法の玉だ！爆弾じゃねえーか！！…  
つたら『魔法の爆弾』とか『爆弾の玉』とか『爆』の字を付けとけ  
よ！だいたい魔法は全然関係ねえーじゃねーか…！」

リュカの怒りは収まらない。

「だいたいテーマクソ爺！…どういう物かも分からぬで偉そうにし  
てんじやねー！死にかけたぞコノヤロー…！」

一緒に被害にあつた老人にまで怒鳴り出す。

「ま、まあまあ…落ち着いてリュカさん！」

宥めるアルル。

「ほ、ホラ、リュカさん…道が開けましたよ…」

宥めるハツキ。

「リュ、リュカさん…先を急ぎましょー！新天地には美女が居ます  
よ！」

宥めるウルフ。

リュカは怒りが收まらないながらもウルフの『美女』の言葉に反応  
し、新たに開けた道へ進み出す。

## グッジョブ、ウルフ！

いざないの洞窟内部は、所々穴が開いており危険極まりない造りになつてゐる。

そんな洞窟内を進行中、アルルがお礼を言い出した。

「リュカさん。さつきはありがとう。おかげで怪我一つしませんでした」

「うん。アルルが無事ならお礼はいいよ……」

「リュカさんこそ怪我は無いですか？」

「ああ大丈夫……このマントはね『王者のマント』って言つてね、結構丈夫なんだ！『王者』なんて僕には似合わないけどね」

「そんな事無いです！リュカさんにとっても似合つてます……その

か、格好いいです」

「ありがとう。でも以前、友人が……『王者？お前は違うだろ！』って言つてやがつた！」

「その友人て……男の人ですか？」

「ああ、ヘンリーって言つ空氣の読めない馬鹿だ！」

友人が男だと知つて何故か安心するアルル。

そんなやり取りを聞いていてヤキモチを妬くハツキ。

「リュカさん！そのマントは凄いマントなのかもしれませんが、一応怪我がないか見せて下さい！私が治療しますからーほら、背中見て下さいー！」

ハツキは此処ぞとばかりにリュカの服を捲る！

そして強引にリュカの服を捲り出でてきた背中を見て言葉を無くす……

傷だらけ……リュカの背中は傷だらけなのである。

それも全て古傷……鞭で打たれ、木材で殴られた傷……

「ごめんなあー……酷い背中だろー？君達若者に見せる背中じや無いよね……」

言葉を無くし固まる3人に優しく謝るリュカ。

リュカの過去を聞き、酷い時間を過ごしたと想像をしてはいたが、証拠の傷を見て考えの甘さに落ち込む3人。

そんな3人を見て元気づけようと歌い出すリュカ。  
そして戦闘が始まり、落ち込む余裕を奪い去られる。

幾度かの戦闘をこなし洞窟内を奥に進むと、3又に別れたエリアに到達した。

進むべき道がどれだか分からぬ…

「俺は左が怪しいと思うな！」

と、ウルフは左。

「私は真ん中が正解だと思います」

と、アルルは中央。

「ううん…取り敢えず右から攻めませんか？」

と、ハツキは右。

自動的に決めるのはリュカ。

「別に僕はどの道でもいいよ。違つたら引き返せばいいんだし…」

「いいえ、リュカさんが決めて下さい！」

「そうだよ！戦闘は拒否つてんだから、こう言つ所で活躍してよー。」

「さあ、選んで下さい！ウルフかハツキか私か！」

「え？：じゃあ、ハツキの選んだ道」

リュカは考えることなく選択する。

「何でハツキなんだよ！」

「そうよ！私、勇者なんですよ！」

「リュカさんは私の事が好きなんですよ！ね！？」

不満顔のアルルとウルフ、満面の笑みのハツキ。

そしてめんどくさそうな顔のリュカ。

「別にさあ…好きとか嫌いとかじや無くて…オッパイの大きい人を選びました。以上！」

リュカは不平を言つ3人を無視して、自分の選んだ道へ突き進む。暫くすると行き止まりになつており、其処には旅の扉と呼ばれる青く美しく渦巻く装置が存在した。

「うん。やつぱりオッパイの大きさと物事の真実はイコール関係にある」

リュカの意味の分からぬ納得に、納得のいかないアルルとウルフは他の通路の確認を要求する。

しかし、

「めんどうさいからヤダ！」

と拒否され、サッサと旅の扉に入つてしまつたリュカを追いかける事で断念せざるおえなかつた。

旅の扉を抜け洞窟より外へ出た一行は、辺りが夜の帳に包まれている事に驚いた。

「あれ？ もう、夜！？ 早いなあ……」

「本当ね！ そんな長時間洞窟内に居たつもりは無かつたけど……」

「夜動くのは危険だし、野営の準備をするか……」

リュカの提案は採用され、一行は野営の準備に取り掛かる。新たなる土地に足を踏み入れた事への感動もなく、ただひたすら休む事だけを考えるアルル達…

リュカの影響力か、それとも天然なのか…

## 別世界より？（前書き）

リュカがDQ3の世界で大活躍（？）をしている間も、DQ5の世界でも色々な事が起こっています。これはそんなお話です。

別世界より？

「グランバニア」

リュカが本へ吸い込まれてから2時間程が経過したグランバニアの国王執務室では…

リュカの息子のティミーと叔父で国務大臣のオジロンが、眉間にシワを寄せて黙り込んでいる。

「…………はあ…………困ったもんだ…………」

長き沈黙の後、溜息混じりで口を開いたのはオジロンであった。

「リュカは厄介事を呼び込む体质らしい…………」

「あの人気が居るがぎりトラブルの種は尽きないでしょ、う…………」

リュカは一応グランバニアの王である…

他国で大臣等が自国の王に対して、この様な物言いをすれば不敬罪として処罰されるであろう！

しかしこの国の王はリュカである…

例え本人の前で言つたとしても『あはははは、1個も言い返せない』と言うだけで終わるだろう。

それが良いのか悪いのかは分からぬ。

それでも、この国の王であるリュカが行方不明になってしまったのは一大事なのである！

バン！！

乱暴にドアが叩き開けられ、王妃のビアンカが入室してきた。

「リュカが本に吸い込まれたというのは本当！？」

一言で言えば不機嫌…それが今のビアンカの表情だ！

「情報が早いですね、母さん。誰が言い触らしたんですか？」

「マリーよ…」

マリーとはリュカとビアンカの次女の事である。

そのマリーがビアンカの後ろからヒョウ口と顔を出す。

「はあ…マリーは誰から聞いたの?」

「可愛い…既に嫁いだ妹より遙かに可愛いらしい妹に、優しく問い合わせた  
すティミー。」

「うん、あのね…私、お父様に、本を読んでもらおうと思つて、この部屋の前に居たの。そうしたらお兄様が大声で叫んでいるのが聞こえてきたのよ。だからお兄様が原因よ」

「…………母さんもマリーも他の人には言つてないですか?」

「はい!お兄様!」

「言つ訳ないでしょ。それより私の事は陛下と呼びなさい!…貴方、一介の兵士なのよ!貴方が身分隠して兵士になるつて言つたんでしょ!自分でバラしてどうすんのよ!」

「す、済みません。王妃陛下」

「お兄様怒られちゃつたね。元気出して」

ティミーはこの妹が愛らしくて仕方ない!

もう一人と違い、性格が父親に似なかつた事を喜ばしく思つている。

「マリーもお兄様と呼んではダメよ!」イツはただの下つ端兵士よ!

「はいお母様。よろしくね、下つ端さん

ただ少し…言つ事にトゲがあるのが難点だ…誰に似たのやら…

「さて、そんな事より…状況を詳しく説明して下さい」

「…………と言つ訳で、気付いた時には国王陛下は本に吸い込まれてました…」

「その本には、その後誰も手を付けて無いのね?」

「はい。吸い込まれたく無いですから…」

ビアンカはティミーの言葉を氣にもせず、本のページを捲り始める。

「あ…ちょっと…母…陛下!不用意に触つては危険です!」

「触らなきや調べられないでしょ！雁首並べて唸つても、リュカは戻つて来ないのよ！」

ペラペラとページを捲り本を調べるビアンカ…

「何これ…？殆ど白紙じゃない！」

「はい。国王陛下もその事に憤慨しておりました」

「で、リュカは勝手にタイトルを書き換えたのね…」

ビアンカはタイトルページに戻るとリュカが書いた『そして現実へ…』の文字を指で撫でる…

そして再度次のページを開き、中途半端に書き綴られた本文を黙読する。

その光景に違和感を感じたティミーはビアンカに近付き本を覗き込む。

「母さん…失礼…王妃陛下。国王陛下はタイトルの続きページには何も書かれて無いと、憤慨してました…ですが、今この本には内容が書かれてます。中途半端ではあります…」

「良い所に気付いたわね。せっかく見てるけど、少しづつ文字が増えているわ…この本…」

「え…？それって…」

「そうよ。今まさに物語が進行中なのよ。そして進行させているのが…リュカ…」

それは驚愕の事実である！

人間が本に吸い込まれ、その人間が物語を紡ぎ出して行く…

「読んでご覧なさい。登場した人物の描写を…」

ティミーは2ページと書かれていない内容を読みだす。

「確かに…この口調もあの人らしい…」

ティミーには文字を読んでいるにも拘わらず脳内で、あの緊張感の欠落した声が響いていた。

「でも…それなら心配する必要は無いのでは？この物語が完結すれば、戻つて来ると思いますが…」

「貴方はこの物語の結末を知ってるの？」

ビアンカの冷たく厳しい口調に、既緊張する。

「い、いえ… 結末は…」

「リュカが物語りの途中… いえ、最後でもいい… 死んでしまったらどうするの? 此処までを読む限り、魔王討伐という冒険の物語よ… ビアンカは恐怖と不安の混じった声で呟く。

思わずティミーはビアンカの顔を見つめてしまった。

青く美しい瞳にはリュカに対する心配と不安で満ち溢れていの…

「では救出しないと!」

オジロンが声を震わせ叫ぶ!

「ええ、そうね。異世界へ行く方法を探さないと… ティミー、貴方はこれから特使としてラインハットへ行きなさい」

「特使… ? ラインハットへ?」

「どうせ国王不在は知れ渡るわーだから正式に世界中へ通達します。こうしておけばグランバニアへ侵略しあつとしている国に対しても、対抗措置を取りやすいでしょ」

「しかし… 可能な限り秘匿した方が…」

「オジロンの心配も分かるけど、何時知れ渡るか分からないと動きづらいのよーバレないようにと制約がつきまとつからー!」

「なるほど…」

「で、王妃陛下は私に何をさせたいのですか?」

「まずラインハットに知らせて軍事、政治両面で支援をしてもらいます。ラインハット以外に此処まで期待できる国はありません。それからポピーを連れてきて下さー」

「……ポピーを… 混乱に拍車がかかりませんか?」

「貴方がルーラを使えればあの娘には頼りません!」

「……なるほど… ルーラ… ですか…」

「ポピーに接触したら、直ぐさまマーサ様をグランバニアにお連れして下さい。異世界への門を開くのにマーサ様のお力が必要になるかもしだせません…」

テキパキと指示を出すビアンカ…

ティニーはそんな母を見て《このまま女王に就任してくれればいいのに…》と、とんでもない事を考えてしまっていた…

別に父の事が嫌いな訳では無い！

しかし、あの父の部下として日常を送っていると、時折イヤになってしまふのだ…

それがリュカという男である。

「それと…もう一つ重要な事があります

「そ、それは？」

「『』の本の管理です！」

「…………何故…それが重要なんですか？」

オジロソは有能である。

ただそれは政においてであり、軍事や陰謀事には向かない。

「この本が燃やされたらリュカがどうなるのか分からぬわ…」

「…………なるほど…では、どのように管理しますか？」

「『』の部屋」と管理します。私とスノウとピールで指揮します。配下はモンスターのみで構成します。私達3人の許可が無い限り、オジロソ…貴方でもこの部屋への入室は禁止します…よろしいですね！？」

こうして緊迫した状況のまま事態は進んで行く…

どちらの世界でもリュカだけが緊張感無く事態を受け入れている。

一番の当事者なのに、一番他人事の様に…

## ロマリア（前書き）

さて、いよいよロマリア編突入です。

## ロマリア

「ロマリア」

アルル達がロマリアへ着いたのは、空が黄昏に染まる頃だった。  
ロマリア大陸のモンスターは、アリアハンとは比べ物にならない程  
強く、一行の進む速度は上がらない。

それでもアルル達にたいした怪我が無いのはリュカのスカラのおか  
げだらう…

「やつと着いたわね…」

「…敵…強いですね…」

「疲れた…早く宿を確保しようぜ…」

アルル達若者3人は、少し離れた所で町娘をナンパしているリュカ  
を無視して宿屋へ入る。

各人、荷物を置いたらロビーに集合。そして近くの酒場へ食事に出  
かける。

すると其処にはリュカが居た。

先程ナンパしていた女性とは、違う女性を伴つてイチャイチャ食事  
をしている。

「何であの人あんなにもてるの?」

思わずウルフはアルルとハツキに訪ねてしまう。

「…だつて…格好いいじゃない!」

アルルの言葉に頷くハツキ。

男としては少し納得のいかないウルフ…

「…にしても、リュカさんの好みって胸の大きい女性?」

「その様だな。あの人も、さつき口説いてた人も胸大きかったな」

「しつかり胸だけはチェックしてんの？エロガキね、ウルフは！」  
ハツキのツツコミにむくれるウルフ。

「でも、だとしたら何で私には手を出さないの？」

「胸だけ大きくて、その他がガキっぽいからじゃないの？」

ハツキの嘆きに間髪を入れず突つ込むアルル。

「だとしたら、胸まで父親に似てしまったアルルには、永遠に興味を示さないでしょうね！」

「…………」

険悪な雰囲気になる少女達。

居た堪れないウルフ。

3人が黙々と食事を続いていると、軽そうなノリの青年2人がアルルとハツキに声をかけてきた。

「ねえねえ！君達この辺じや見かけないけど何処から来たの？」

と、男A。

「こ」の先にスゲー旨いカクテル出す店あんだけど、一緒にいかない？」

と、男B。

彼らの名誉の為に記載しておく。

彼らはそこそこ美形である。

10人の女性に声をかけたら8人は誘いに乗るぐらい美形である。しかし彼らの不運は、彼女らの男性基準がリュカであることだ。

「失せろ、不細工！」

ちよいキレ気味のアルルの発言。

「一緒に居る所を他人に見られたくないの！離れて下さい！」

イラついてるハツキの発言。

懐からゴールドを取り出し、勘定を終え店を出るウルフ。

店内の喧噪を見ないようにして酒場の扉を閉める…

その後の事はよく知らない…

怖くて2人には聞けない…

ただ分かっている事は、酒場が営業停止になるほどボロボロになつ

たにも拘わらず、少女達にはかすり傷一つ付いていない事である。

「そなた等がアリアハンから來た勇者達か？」

「はっ！私は勇者オルテガの娘、アルルと申します」

「」はロマリア城の謁見の間。

傳ぐアルル達の前に、ロマリア王とその王妃が玉座に座つてゐる。

「よこよい…」つぱつぱつたのは苦手でな…全員面を上げよ。樂にせい」

その一言を待つていたとばかりに傳ぐのを止めるリュカ。

その行為に、さすがに驚くロマリア王。

「ま…まあ、何だ…我が國も勇者達一行に援助をしたいのだが、そ  
うもいかん。恥ずかしい事に我が國も苦しくてな。それに、そなた  
等が本当に魔王を討伐できるか分からぬからな…」

「いやいや、王様！何も小遣いやるだけが援助じや無いでしょう！  
通行許可を貰ってくれるだけで良いッスよ！西へ東へフリーーパスつ  
てね」

本当に他国の王と謁見しているのか、疑いたくなるような口調のリ  
ュカ。

「貴様ー！！それが陛下に対する口の利き方か！…」

もちろん激怒する家臣。

「何だよー！王様が楽にしろと言つたから、楽にしてんじゃん！アレ  
だよ、君…王様が許可したのに、家臣がキレると王様の度量の狭さ  
をアピールしている事になるよ。僕、他の国に行つたら言つちゃう  
よ『樂にしろ』と言つたから樂にしたら、ブチ切れた小者が納める國  
だつた』って…ベラベラ喋るね！」

リュカは元の世界で、この様な態度で外交問題を悪化させた事が何  
度もある。

「ふおふおふお…面白い…お主、名は？」

「リュカです」

「うむ、リュカよ！余もざつぐぱらんに話そつ。実はな…勿体ぶつたのは、やつてもらいたい事があつたからなのだ！その為に『援助できん』などと言つてしまつたのだ…」

「まあ、こつ言つのは駆け引きですからね」

「我々に出来る事であれば何なりと！」

リュカのやり取りに胃が痛くなつてきたアルルは、リュカが何か言う前に引き受けた事を了承する。

「うむ。カンダタと言つ盗賊団が我が国の『金の冠』を盗んだのだ！それを取り返して来てほしい」

「見事取り戻せたなら、褒美を取らせましょ」

王妃がリュカを見つめ妖しく微笑む。

「別に人の女に興味ないから、褒美と言われても…ぐふつ…」  
とんでもない発言をするリュカの鳩尾に、アルルの拳がめり込む！  
「『褒美を戴くまでもなく、全力を尽くさせて頂きます！では、早速行つて参ります！』

蹲るリュカを引きずるように、アルル達は謁見の間を後にする。

「信じらんない！私、胃が痛くなつたわよ！」

「まあまあ…落ち着いてアルル」

「そうだよ。リュカさんらしかつたじゃん！」

早々に宿屋へ戻つた一行は、リュカを囲み騒ぎ出す。

「リュカさん！不敬罪つて分かります！？重いんですよ！！」

「言葉の意味は知つてるけどさ…でも、僕の国ではあんなもんだよ。不敬罪になつた奴いないよ」

「何ですか、そのネジの緩い王様は！」

「あはははは、1個も言い返せない」

笑つている場合じや無いはずなのに、大爆笑のリュカ。本当、ネジ

が緩いのかもしない…

「なあ、アルル。安易に金の冠奪還を受けたけど、カンダタつて奴が何処に居るのか分かつてるのか？」

「こ、これから情報を集めるの！」

ウルフの冷静な指摘に、焦りまくつて答えるアルル。

「僕知ってるよ」

そして何故か情報だけは持つているリュカ。

「此処から北西の山脈の向こうに『シャンパニーの塔』があつて、其処がアジトらしい」

「……情報源は？」

聞くまでも無い事なしだが、聞かずにはいられないハツキ。

「うん。昨晩、一緒に食事した娘がベットで教えてくれた。因みに山脈越えはきついから、一度北の『カザーブ』という村に寄つてから迂回した方が良いってさ！」

「じゃ……じゃあ、目的地は決まつたわ！出発は明日早朝ね！…今内に装備を揃えておきましょう！」

若者3人は装備を一新する為城下を彷徨い、リュカは今宵のお相手求め城下を彷徨う。

新たな装備は手にはいるのか…

新たな情報は手にはいるのか…

新たな命を紡ぐのだけは勘弁してほしいものである…

## ロマリア（後書き）

次回、新キャラ追加です。  
5人パーティになっちゃうけど、  
まあ、細かい事は目を瞑つて下さい。

商人

＜ロマリア領＞

首都ロマリアから北へ進むと、木々の生い茂った険しい山道が続く。昨今ではモンスターのみならず、山賊も出没する危険な道。アルル達は襲い来るモンスターを撃滅しながら突き進む。彷徨う鎧や軍隊がに、キラービーなど…

敵は強くアルル達は苦戦の連続である。

しかし若さのおかげか、一戦毎に実力は向上している。

日も暮れかけ野営の準備に取り掛かると、不意にリュカが辺りを気にし始めた。

「悲鳴が聞こえた！」

「え！？」

リュカの一言にアルル達も耳を澄ます。

「何も聞こえないわよ…」

「いや…美女の悲鳴だ！」

「何で悲鳴だけで美女だと分かるんだよ！」

ウルフのツツ「ミを無視して、森の中へ走り出すリュカ！

「ちょ、待つてよ！」

慌ててリュカを追いかける3人。

「キヤー！！！」

「ガタガタうるせー！いい加減観念して犯されろ！気持ち良くなして

やつからよお」

4人の「ころつき風の男達が、1人の女性を押し倒し手足を押さえ付けている。

「あんた等ウチのボディーガードやろーそう言つ契約やつたやん！」  
「馬鹿かねえーちゃん！あんな端金で雇われると思つてんのか？」

「ぎやははは！謝礼はオメーの身体だよ！」

男の一人が女の服を破り取る！

「キヤーー！」

「へへへ、顔はガキっぽいが体は最高だな！」

破り取られた胸元から、かなりの大きさの胸がこぼれ出る。……  
巨乳です！

「イヤーー！」

「ここは通常の街道からはかなり外れてんだ！人なんかこねーよ！  
騒いでねーで、大人しく楽しめよ。最高の時間にしてやつからよー！」  
男は徐に女の上に被さり行為を始めようと/or>した、その瞬間…  
女の上で四つん這いになつっていた男が、大きく吹き飛んだ！  
そして他の3人も訳も解らず身体に強い衝撃が走り、後方へ吹き飛  
ぶ！

「お美しいお嬢さん。無事ですか？」

衣服がボロボロの女性に、自分のマントを羽織らせ優しく問い合わせる男、リュカ。

「あ…ああ、平氣や…犯される寸前やつたけど、まだ処女や。」

それを聞いて優しく微笑むリュカ。

の方もパニックからか、リュカの魅力なのか分からぬが、必要な情報まで伝えてしまつてゐる。

そしてようやく追いついたアルル達3人。

「本当に美女の悲鳴だつたんだ…」

呆れ感心するウルフ。

「しかしそうこんな遠くの悲鳴が聞こえたわね！」

呆れ驚くアルル。

「美女の悲鳴だつたからね！そつじやなきや聞こえないよ」

「悲鳴に美女も何もないでしょ！」

呆れ疲れるハツキ。

そこへ、ごろつき4人集が復活し戻ってきた。

「テメー！不意打ちとは卑怯じやねーか！」

「か弱い女性を、男4人がかりで襲つてるヤツらに言われたくない

！」

「うるせーーーぶつ殺してやる！」

「おい、よく見りやいい女を2人も連れてるじゃねーか！」

「へへへ…おい、にいちゃん！命が惜しかつたら女置いて消えな！」

ごろつき4人集は各々武器を手に近付いてくる。

「お前等こそ、武器を捨てて消え失せろ！相手するのが面倒だ！」

「てめー、ぶつ殺してやる！」

「それ、さつき聞いた。他にボキヤブライアは無いの？」

リュカの安い挑発に、カツとなつた1人が襲いかかる！

しかし次の瞬間、男の頭はリュカの杖に吹き飛ばされた。

頭部の無くなつた体から、勢い良く血が噴き出し辺りを染める。

ごろつき4人集は、ごろつき3人集となり目に見えて怯んでいる。

「テ、テメー…お、俺達が誰だか知つててやつてんのか！？」

「え！？何？有名なの？じゃあ、サイン貰おうかな……ペンが無いから、お前等の血をインク代わりにするけどね！」

脅し文句と共に、1歩踏み出すリュカ。

「お、俺達は、カンダタ一味だぞ！カンダタ親分がオメー等をぶつ殺すぞ！」

腰が引け、声が裏返る男を見てリュカは更に脅しをかける。

「さつきお前等が言つてたろ…」には人が来ないって。」

「だ、だからなんだよ！」

「誰がカンダタ親分にチクルの？お前等全員ここで死ぬんだから、チクれないでしょ！」

リュカが満面の笑みでじろつき3人集に近付く。

そして……

「ホンマ、危ない所を助けて頂きありがとう。ウチはエコナ。まだ駆け出しやけど商人や！」

一行は当初の野営場所へ戻り、自己紹介から始めた。

エコナは大商人になる為、世界を旅し修行している駆け出し商人だ。

「ほな、おたく等が勇者様」一行なん？

「まあ……便宜上は……」

「ほんなら、ウチも一緒に付いていいてええか？ウチ、目的地があるわけじゃないねん！ただ世界中を巡つて、見識を広めたいねん！」  
「それは構わないけど、私達の旅はとても危険なものよ！それでもいいの？」

「心配無用や。さつきみたいに4人がかりじゃムリやけど、ウチとて多少は戦えるんや……それにリュカはんと一緒にの方が安全そうやん！」

先程リュカの強さを畠の当たりにしたエコナ。

「まあ……そんな訳や。よろしゅうたのんます」

「とにかくリュカはん。ウチ、服がボロボロやん……代えの服も無いし、カザーブまでマント貸してほしいねんけど、それじゃリュカはんも困るやん」

「いや、別に「ほんでな、一人抱き合つていればマントを一人で使えると思つねん！」

エコナはこじぞとばかりにリュカに色田を使い、落としかかる。リュカを無料のボディーガードに仕立てるつもりだ。

「いいね！も、ぎゅーっと抱き合っていいようか！」

「良くありません！私の代えの服を使って下さい！」

「アンタのじや胸がきつそうで着られへん」

差し出されたアルルの服を見て言い切るエコナ。

「じゃあ、私の使つて下さい！絶対着れます！」

ハツキは強引に服を渡してエコナをリュカから引き離す。

『男はここにもう一人居るのに、何で俺は相手にされないんだ？』

ウルフが女3人のやり取りを憮然と見つめていると、マントを返してもらつたリュカが小声で話しかける。

「ウルフ。女の子に相手してほしいのなら、自分から声をかけないとダメだよ。待つてたつて何も起きないよ！」

はたしてウルフは、どんな大人になるのか楽しみである。

商人（後書き）

新規参入キャラの口調について…

今回より新キャラ『工コナ』が登場しましたが、  
彼女は大阪弁風の口調をしておりますが、

あくまで『風』…つまり似ているだけです。

「そんな喋り方ない！！」とか「バカにしてるのか」などと書いつく  
レームは、

一切受け付けております。

何度も言いますが、大阪弁風なだけで大阪弁ではありません。

また、方言をバカにする目的で書いてるつもりはございません。  
万が一その様に感じられたのなら、それは作者の表現力（力量）不足によるものです。

御不快感をあたえた旨、深く陳謝致します。

蛇足ですが、

エコナはフレアさんレベルです。（例のアレが…）

## カザーブ

「カザーブ」

「前も後ろも山ばつかー」

リュカが勝手な歌を歌いたくなる様な村…カザーブ。  
リュカの歌通り四方を山で囲まれている。

アルル達は着いて早々、エコナの装備を揃える為、武器屋や道具屋をハシゴする。

「なあなあリュカはん！これなんてどう？ウチに似合つ？」

「うーん…折角胸が大きいんだから、もっと胸を露出した服はビツ  
？僕はそっちの方が好き」

「ほな…これは？」

休日のショッピングモールでキャツキヤウフフとイチャつバカツ  
ブルの如く、リュカとエコナはショッピングを楽しんでいる。

それを恐ろしい形相で睨むアルルとハツキ。

更にウルフは女の扱い方の手本としてリュカの言動をメモしている。  
(大丈夫か？)

「早くしなさいよ！日が暮れちゃうでしょ！」

「ウチ等には気をつかわんでええよ…アルル達は先に宿へ戻つてて  
下さい。ウチ等はウチ等で勝手にやりますから」

「うん。自由行動ね」

そう言つてリュカとエコナは別の店に入つて行く。  
一人きりにしたくないアルルとハツキは、渋々ついて行く。  
ウルフは…言つまでもない…

一通りの物を揃えたエコナは、リュカを伴い村の酒場で“ティナーテート”を敢行する。

だがアルル達も一緒に為、どう見てもただの食事会である。

大して広くない店内には、若いカップルが先客として食事をしている。

5人はテーブル席に座る。

「ウチは取り敢えずビール！みんなは？」

ほぼ座ると同時にエコナは叫ぶ。

「私達は未成年です！お酒は飲みません」

「ウチかて18や！気にしたら負けやで。リュカはんは飲むやろ？」「お酒嫌いだからい！」

リュカは表情を渋らせ拒绝する。

「リュカはん、飲めへんの？」

「う～ん…飲めるけど、強くないし…良い思い出が無いから…」

「何や？そのやな思いでつて！酔つて上司殴つたん？」

下世話な話に興味津々のエコナ。

エコナ程では無いが聞きたがつてている他3人。

「うん…実はね…僕に初めての子供が産まれた日に、以前から準備されていたパーティーがあつたんだ…しかも僕が主賓の…本当はパーティーなんて出たくなかったんだけど、出ない訳いかないじゃん。で、イヤイヤ出席して無理矢理酒飲まされて、気が付いたら気絶して奥さんが魔族に攫われてた…」

リュカの話は続く…

身内に居た裏切り者の事、その後8年間の石像化、生まれたばかりの双子は8年間も両親が居なかつた事…

孤児として育つたハツキとウルフ、そしてやはり孤児のエコナはリュカの子供に共感を覚え涙する。

アルルもリュカの人生の壮絶さに言葉も出ない…

「おいおい…泣くなよ…今はもう幸せだよ。みんな…」

「そか…子供は親と一緒に暮らすのが一番幸せや！」

「うん。そうね！早くバラモスを倒して、世界を平和にしないとね！」

「」

「あの…すみません…」

アルルの言葉を聞いた隣席のカツプル（女）が、不意に話しかけてきた。

「バラモスを倒すという事は…貴女達は勇者様ですか？」

「べ、便宜上は…」

たじろぐアルル。

「ではお願ひがあります。ここより北に行つた所にある『ノアーノル』と言う村をお救い下さい！」

・

カツプル（女）の説明では、10年前から村人が皆眠つてしまつ呪いにかかっているらしい。

何故呪いがかかるているのかは分からぬ様です。

カツプル（女）は幼い時に父と共に村を出たが、弟が村で長き眠りについている：

「お願いします…どうか弟を…」

泣きじやくりながら懇願するカツプル（女）…

「わ、分かりました…ひとまず調査をしてみますから…」

辟易するアルル…

一行は逃げる様に宿屋へ戻り、作戦会議を始める。

「どうすんだよ。カンドタから金の冠を取り返す途中だろ…」

「分かつてること…ほつとけないでしょ…！」

「じゃあ…どちらから先に行きますか？」

「そんなん簡単やん！寝ぼすけ共にはもう少し寝てもらつて、先にカンドタや！カンドタは遠くに逃げてしまう可能性もあるかもし

れへん

「じゃあ決まりね！明日早朝にシャンバーの塔を目指します」

話が決まった所でリュカが口を開く。

「どうして僕の部屋で作戦会議をしてるの？」

「だって…他の人の部屋じゃ、リュカさん会議に出席しないでしょ？『僕は決まった事に従うよ』って言って！」

「ううん…そうだね。でも、僕が居たつて会議に参加しなければ同じじゃない？」

「そんなことはないわ！後で説明するのは面倒なの。一緒に居れば説明を省けるでしょ！」

「なるほど！納得しました。…もう会議終了だよね。解散だよね」

「ええ…お疲れ様…」

「じゃあ、僕、散歩してきます」

「ちょっと…明日は早いのよ！寝不足じゃ困るんだけど…」

「あはははは、大丈夫だよ！僕は戦わないから！寝不足OKでしょ！じゃあね～」

各自が自分の部屋に戻る中、リュカだけが宿屋から外出して行く。阻みたいが阻む手立てがないアルル…恨めしそうにリュカの背中を見つめ、大きく溜息を吐く…自分の部屋に呼ぶ事が出来れば、どんなに嬉しいかと…

翌早朝…

一向に起きていこないリュカとエコナを起こすべく、3人は一人の部屋に突入する。

リュカの部屋はもぬけの殻…

仕方なくエコナだけでも起こしそうと、部屋を大きくノックして中に突入すると…

裸のエコナが裸のリュカに重なる様にして寝てているではないか！

「な……な……何してるんですか！！」

「やあ……おはよう……もつちよつと静かにしよつよ……周りに迷惑だよ」

「ホンマにねえ……もうちょい静かにしてほしいわあ～」

「この状況を見られても気にしない2人……」

「それどころか優雅に目覚めのキスをしてから仕度を始める2人……」

「いいなあ～」

ハツキが小声で羨ましがる……

間違つた道に進んでいる事に気付いてほしいものである……

## カザーブ（後書き）

またかよ、この男！  
状況分かつてんのかよ！！

シャンパーーの塔（前書き）

久しぶりにリュカがぶち切れます。

## シャンパーーの塔

＜カザーブより南西＞

潮風が心地よい平原をモンスターの雄叫びが轟く。

毒いもむしにギズモ…

襲い来る敵も強力になつて行く…

しかしアルル達も成長著しい！

アルルがメラを唱え、ハツキが憶えたてのバギでどごめを刺す。

敵の数が多ければ、ウルフがギラを唱え蹴散らす。

新メンバーのエコナも、鉄の槍で敵を葬り去つて行く。

5人パーティーで、1人何もしないのは何時もと同じ…

それでもエコナの参入でフォワード要員が増え、パーティー・バランスが向上した事は喜ぶべき事だ。

「お！？見えて来たでーーアレがシャンパーーの塔や  
カンドタ一味が根城にしている塔…

強い潮風に晒されながらも、威風堂々とそびえ立つその塔に、一行  
は進入する。

＜シャンパーーの塔＞

塔の内部は何処からともなく腐敗臭が漂つていて

「この匂い…何？」

アルルは顔を顰め、ハツキはいまにも吐きそうだ。

怪訝な表情で進むリュカは、塔の片隅の部屋で不愉快な物を発見する。

其処には大量の死体が無碍に放置されている場所…

「な、何これ…！」

「何でこんなに死体があるんだ？」

100体は超えているであろう死体の山…

既に白骨化しているものから、腐敗の著しいもの…

先程捨てられた様な死体まである。

死体の7割はロマリアの兵士と思しき恰好だが、残りはどう見ても兵士ではない。

中には衣服を引き裂かれ、レイプされた形跡のある女性の死体や、年端もいかない少女の死体…

「酷い…」

あまりの光景に言葉を失つていると、部屋の奥から人の息づかいが聞こえてくる。

「奥に誰か居る様だ…」

リュカが声のする方へ進み行く。

其処には更に不愉快な事を行つてている男が1人いた。

まだ6・7歳の少女を犯す男…

その少女も今は息がない…

だが、つい先刻まで生きていたのである…

多くの男に犯され息絶えた少女を、ここに捨てに来た…そしてこれで最後とばかりに欲望を少女の死体へぶつけて…この男のしているのは、そんなところだろう！

「いい加減にしろ！」

リュカが男の脇腹に強烈な蹴りを入れる！

「ぐはあ！」

大量の血と共にその日の食事を全て吐き出し男が唸る。

「な、何だ…デメ…！？」

「うるさい…貴様に名乗る名前はない…カンダタはこの上に居るの

か！？」

「へへへ…お前等もロマリアに頼まれた連中か…サッサと上に行つてぶつ殺されてこいよ！そっちの女3人も犯されまくつて死体になつたら俺が抱いてやるぜ！」

リュカは徐に男の頭を鷲掴みにすると、そのまま力を込めてゆく！  
「うぎやああああ！」

（ぐしゃ…）

腐つたリングを握り潰すかの様に、リュカは男の頭を握り潰した！  
そしてリュカは黙つて歩き出す。

アルル達は慌ててリュカに続く。

リュカの怒りが伝わつてくる為、無言のままついて行く。

塔を上へ進む中、カンドタの子分達がリュカを見つけ襲いかかつてくる。

アルル達は素早く臨戦態勢をとろつとするが、剣を抜く間もなくリュカが敵を蹴散らし、戦闘が終了する。

目の前で目撃しても、リュカが何をしたのか分からぬ程一瞬で…  
『何なのこの強さ…強いとは思つていたけどこれ程とは…』  
アルルだけではない…他の3人もリュカの強さに驚かされるばかりだ…

最上階へ着いたリュカ達は、まさに歪んだ欲望の宴を目撃する…  
2人の女性を15人が代わる代わる犯しているところだ！

「あ、？何だテメー！何処から入つて…ぐはっ！」

15人いた裸のブ男達は一瞬でこの世から消え去り、奥の部屋からカンドタらしき大男が姿を現す。  
「な、何だこりや！？どういう事だ！」  
「お前がカンドタか？」

「そう言つテメーは誰だ！？」

「そんな事どうでもいい…金の冠を返せ！…そうしたら一瞬で殺して

やる！」

室内の状況を見定めたカンダタは、慌てて奥の部屋に引き戻りドアに鍵をかける。

リュカは勢い良くドアにタックルするも、意外に丈夫でなかなか突破できない！

「リュカさん退いて！」

ウルフがリュカに退く様に指示する。

「イオ」

そしてドアに向けイオを唱えた！

（ドカーン！）

ドアは吹き飛びリュカが突入する！

まず正面に見えたのは、窓の外で両手を縛られ宙吊りになる裸の女性…

その女性の頭には金の冠…

女性の両手を縛り吊すロープは、室内を通つて部屋の反対側の窓辺に立つカンダタの手…

「おつと！俺様はキメラの翼を使って逃げさせてもらひう！俺の事より、女を気に入した方が利口だ！じやあな！」

そこまで言つとロープから手を放しキメラの翼で飛んで行く…

女性は支えを失つたロープ」と地上に落卜し始める…

慌ててロープを掴むリュカ！

「くつ！何でヤローだ！」

女性は2メートル程落下したが、リュカのおかげで大事は免れた。

ひとまずは女性達に衣服とキメラの翼を渡し、各自先に帰らせた。

「カンダタ…逃がしちゃったね…」

「でも、金の冠は取り戻したわ！…これでロマコア王に報告できるわ

よ

アルルは出来る限り明るい口調でみんなに話しかける。  
しかしリュカは、一人静かにカンドタの逃げた空を見つめ物思いに耽る。

アルルもハツキもエコナも…何を話しかけていいのか分からない…  
でも、何時ものリュカに戻つてほしく、全てをウルフに押し付ける!  
『な、何で俺なんだよ…』

「な、なリュカさん…俺…リュカさんが怒るの初めて見たけど…  
1階に居た女の子とは知り合いなの？」

振り返つたリュカの表情は何時もの優しいリュカだった。

「僕にもあのくらいの歳の娘が居るんだ…とっても可愛いんだよ」

優しくウルフの頭を撫でるリュカ。

自分の娘と重ねてしまい、激怒する姿を見た少女達…

その底知れぬ優しさに、更に恋心を深めて行く。

悪循環であるにも拘わらず…

## 裸の付き合い

＜ロマリア領・北部＞

アルル達はリュカを囲み武器を構えている！

「はあ！」

アルルは剣で一閃！

（キン！）

「甘いよ

しかしリュカに難無く弾かれる。

「メラ」

「バギ」

ウルフのメラもリュカのバギで相殺される。

「いくで！」

「おつと！」

エコナが鉄の槍で突くも掠る事すらしない。

「マヌーサ」

ハツキがマヌーサを唱えるも、呪文の効果は全くない。

・

「うん。みんな強くなつたね！ただもう少し連携して攻撃した方がいいよ」

4対1でリュカを攻撃したにも拘わらず、リュカは息を切らさず何時もと同じ口調で語りかけてくる。

アルル達は激しい運動量のせいで、喋る事も出来ず座り込む。

リュカはアルル達に頼まれ、完全な実践形式での手合わせを行つた。手加減無し（アルル側）の手合わせだった為、魔法も当たれば怪我

を免れなかつただろうし、物理攻撃も当たれば大怪我をするレベルの手合わせだつた…当たればだが…

「さあ、『じ』所望通り一斉に手合わせをしたよ。僕もつ疲れたよ…今日はこの辺で野営で良いよね！？」

「…ええ…」

ぐつたりしているアルルは、何とか体を起こしリュカの質問に答えた。

「じゃあ僕はご飯の準備に取り掛かるね！そう言えばすぐ其処に小川が流れているから、女の子達は水浴びでもしてきただろ？大丈夫、覗かないよ！それにウルフが覗かない様に見張つてるよ」

『俺だつて覗かないよ！』

と、突つ込みたいのだが疲れきつて突つ込めないウルフ。何とか体を起こし、着替えとタオルを持って小川へ歩く少女達。

「本当…リュカさんつて凄い体力ね…私達がこんなに疲れる程攻撃したのに、汗一つかいてない…」

「まったくや！ベットの上でも凄かつたで！」

「止めて下さい、いやらしい話をするの！」

年頃の女の子が3人集まれば、自ずと話の内容は決まってくる。

「…でも、どうしてリュカさんと…ああ言う状況になつたんですか？」

「なんや、ハツキは気になるん？いやらしい話は嫌いなんじゃないん？」

「…い、意地が悪いです！」

「まあええ…ウチな、利用しようと思つたんよ。」

「利用？リュカさんを！？」

「色仕掛けで迫つて、ウチの無料ボディーガードとして側に置かせようと考えてたんよ！」

H「ナは豊満な胸を両手で持ち上げ、体ごと左右に振りながら話す。

「ほんで、リュカはんが一人で村を歩いているのを見つけたから、改めてお礼をしたい言つて話しかけたんよ！」

アルルもハツキも黙つて聞き入る。

「そしたら『別にお礼なんていいよ。下心ありで助けたんだから』って爽やかに笑いよるねん！普通言わへんよ、下心ありなんて……だから聞いたんよ『下心つてなんですか』てな。」

「そしたら何て答えたの？」

「『いつもあつさりと『うん。エッチ出来ればいいな』って笑いながら答えるねん！ウチも最初は処女を守るつもりやつたんけど、あの笑顔に落ちてもうた！気付いたらリュカはんに抱き付く、キスしてたんや……』

エコナは自分の体を抱き締め、クネクネしながら語る。

「あの男ズルイねん！他の飢えきつた男みたいに『やらせろー』って、がつついで来ないクセに、自身の欲求はストレートに話すねん！しかも最高の笑顔付きで……」

……  
幾ばくかの沈黙が流れる……

「リュカさん……格好いいわよね……シャンパニーの塔でも……」

アルルはシャンパニーの塔でのリュカを思い出す。

「怒つたリュカさんは怖かつたんですけど……優しいからこそ、あんなに怒つたんですね……」

ハツキの言葉に皆頷く。

「奥さんて……どんな人なんやろ……？」

「リュカさんが言つには、すんごい美人だそうですよ。奥さん以上の美人に出会つた事無いって言つてました……」

「ウチ等かてそう悪くないと思つで……」

「リュカさん……元の世界へ帰っちゃうのかな……？」

「……」

アルルの一言に黙りだす。

「させへん！ウチが色仕掛けで落として、この世界に居たいと思わ

せる！」

「私も協力します！」

エコナとハツキが手を組む！

「アルルはええんか？リュカはん帰つても…」

「……私は… そう言ひのイヤ！」

「「そう言ひのつて？」」

キレイにハモるエコナとハツキ。

さすがにちょっと照れくさかつた様で、顔を見合わせ苦笑い。

「色仕掛けよ！私もリュカさんには帰つてほしくないよ！でも、この世界を気に入つて帰らないのなら歓迎だけど… 女の為について言つのはイヤ！それに元の世界には家族が待つているのよ… 家族の事を思うと…」

「アルルの言い分も分かるけど、ウチは誘惑を諦めんよ。アルルに手伝えとは言わへんけど、邪魔だけはせんといでね！」

『でも… きっと無駄よ！リュカさんが色仕掛け程度で落ちるとは思えない… まあ、誘いには乗るでしそうけども…』

奇妙な連帯感が生まれた、かしまし三人娘。（古つ…）

リュカは無事元の世界に戻れるのか！？

それより、戻つた後が無事ですか！？私はそれが心配だ！

「ハツキ遅いね…」

「じゃあウルフ！『遅くて心配になっちゃつた？』とか言ひて見てくれば」

「殺さるよ…」

「平氣だよ。裸の一いつくらい見られても」

「リュカさんにはね！」

「みんなの事が心配だつたつて言ひれば大丈夫だよ！何だつたら、足が滑つたとか言ひて押し倒しちゃえば？不可抗力なんですう… 男共は男共で、しょうもない話を続けている…

このパーティーの男女間の温度差は、結構深刻なものなのかもしない…

リュカが居なければ、もっとまともな冒険が出来たであろうか？

## 裸の付き合い（後書き）

サブタイトルからエッチな内容を想像したアナタ！

仲良くなれそうですね。

今のところ、パーティー内で手を出した女性は1人だけ  
奇跡みたいな数字ですね！？

## ノアール

「ノアール」

「ニニがノアール…」

溜息を吐き周囲を見渡すアルル。

人々の生活が途絶え、草木が鬱そうと生い茂る村。  
その村の各所に横たわり眠り続ける人々…

「何故…こんな事に…？」

「なあ…ここにいたら俺達も目覚めなくならないのか？」

「それは大丈夫じゃ！」

ウルフの疑問に答えたのは、一人の年老いた男性だった。

「儂は皆が眠りについてから10年間、この村で生活をしておるが、  
呪いの影響を受けた事はない」

「あ、貴方は？…どうして貴方は呪いにからなかつたのです？」

「うむ。儂はイノック。生まれも育ちもこの村じゃ…儂が呪いにか  
からなかつたのは、村に呪いがかかつた時にちょうど居なかつたん  
じや…家出した息子を捜す為、村の外に出ておつた…」

イノック老人は切々と語る。

エルフの姫と恋に落ちてしまった息子ノイル。

エルフの娘は、エルフの里を捨てノアールに…ノイルの元にやつ  
て來た。

しかし村人はエルフの魔力を恐れ、迫害をした…

一緒に住んでいたイノック老人にも被害が及び、居たたまれず息子  
にエルフと別れる様説得。

しかしノイルは受け入れず、エルフの娘と共に村を出て行つてしま  
つた…

当初は行く當てなど何処にもない息子の事だから、すぐに帰つて來  
ると思っていたが、1週間たつても戻る気配がなく、心配になり近

隣の村や町を探し回つたイノツク老人。

2ヶ月探し回つたが消息すら掴めず、ひとまず村へ帰ると、この有様だつた…

「どうか旅の方…エルフの隠れ里に行つて、エルフの女王を説得してはくれませぬか…」

アルルに縋り付く老人。

「勝手な事言うな…！」

静かな村内にリュカの怒号が響き渡る！

「アンタ親だろ！息子が連れてきた彼女を認めないなんて…アンタが息子達を認め…応援してやれば、こんな事にはならなかつたんじやないのか！？」

「し、しかし…エルフですぞ！」

「それがどうした！エルフが何だ！種族の違いがどうした…！アンタは自分の事しか考えてない！他の村人に白い目で見られるのがイヤで、別れる様に言つたんだろ！息子の幸せなんて考えもせず、愛し合つ二人を引き裂こうとしたんだ！」

「エ、エルフと人間で…し、幸せになど…」

「やつてみなければ分からぬだろ！アンタ、二人の馴れ初めを聞いた事あんのか？」

「…………」

答えようとしないイノツク老人…

「ふん！やつぱり…二人がどれくらい愛し合つてゐるか、どうして惹かれ合つたか知りもしないで…どうしてそれで、幸せになれないつて言い切れるんだ！？」

「リュカさん…それくらいで…」

堪らずアルルが止めに入つた。

「…確かに…不幸になるかもしねれない…でも、自分たちで選んだ道だ！他人の言いなりで幸せになるよりも、自分で決断して不幸になつた方が…」

「アンタに何が分かる…」

イノツク老人が絞り出す様に呟く。

「分かるね！僕にも息子が居る…とても真面目な良い子だが、どこか抜けてる感がある息子だ。いつか、どつかのバカ女に騙される様な気がして、ワクワクしてるさ…でも絶対、『別れる』なんて言わない…僕は息子を…ティミー信じてる！」アイツはきっと良い女を連れてくるつて…」

リュカは嬉しそうに、自分の息子の事を語っている。

それをイノツク老人は見る事が出来ない…自分の息子を信じる事が出来なかつたから…

アルル達は村の宿屋を勝手に借りて、今後の事を話し合つてている。

「取り敢えず…エルフの里に行つてみましょうか…」

「でも、会つてくれますかね？いきなり攻撃されませんかね？」

「それは分からぬけど…でもこのまま、ほつとく訳にもいかないし…」

アルルの溜息混じりの提案に、リュカは何も言わない…

視線を向けても優しく微笑むだけ…

「あの…リュカさんは…この村を救うのに反対じゃないの？」

恐る恐るウルフが訪ねる。

「（クス）反対なんかしないよ。さつき怒ったのは、息子の幸せを考えていられないジジイに対してだよ。まあ…エルフを迫害した村人達にも、少しほは腹が立つけど…誰しも自分たちと違う存在は怖いんだよ…でも、こっちの世界じゃエルフって怖い存在なの？」

「リュカさんの世界じゃ違うの？」

「そうだよ！エルフだよ！人間より遙かに長生きで、とてつもない魔力を持っているんだよ！人間なんて一瞬で滅ぼしちゃうよ！」

ウルフは興奮気味にエルフについての風聞を披露する。

それは、この世界の人々が古くから言い伝えてきた事であり、何ら

確証に基づくものではない。

「……でもウルフ……まだ滅ぼされてないよ。この村も……人間全ても

……」

「それは……その……」

リュカは優しく微笑みながらウルフの頭を撫でる。

「そんな思いこみだけで敵対しないでさ、仲良くなる努力をしようよ。……エルフの里か……楽しみだなあ」

「？……リュカはん……何が楽しみなんや？ウチ、少しばかりビビッとするで！」

よく見るとアルルとハツキも、エルフへの恐怖で表情が若干引きつっている。

しかしリュカは気にすることなく語る。

「エルフってさあ……美人が多いんだよね。しかもエルフは男の子の出産率が低いんだって！まあその分長寿でカバーしてるみたいだけ……」

「それの何が楽しみなの？」

「つまりだ、ウルフ君！そのエルフの里は美女だらけって事だよ！僕の知り合いのエルフも、頭は緩いけどすごい美人だもん！」

常人とは異なる思考回路でものを語るリュカ：

下手に手を出したが為に、物事が厄介にならないか、不安になる4人……

トラブルの予感は尽きません。

〈ノア二ールより西の森〉

一行は翌早朝にノア二ールを出発し、一路西へ……エルフの隠れ里を目指す。

大勢の美女に出会える事を期待するリュカは、一人ウキウキ気分で『恋のバカンス』を歌い、いつもの様に敵を呼び寄せる。

現れたのは『バイリイドック』と呼ばれる、犬のアンテットが4匹。

「あーワンコだ！…でも腐ってる。臭いがきついな…」

素早く臨戦態勢に入るリュカ以外の4人。

しかし先制したのはバイリイドックだ！

バイリイドックが遠吠え！

アルル達の体が淡く光る…

「『ルカナン』だ！気を付ける！」

何故だか動物の言葉が分かるリュカが、アルル達に注意を促す。

それを聞き、ウルフが『スクルト』を唱え、守備力を上昇させた。

「ナイス、ウルフ！じゃあ私も、バギ！！」

しかしハツキのバギは効果が薄く、バイリイドックにダメージを与えられない。

「ギラ」

続いてアルルがギラを唱える。

真っ赤な炎がバイリイドック達を赤く包む。

1匹のバイリイドックが炎の中から飛び出し、アルルに襲いかかる！

「甘い！」

だが、アルルの遙か手前でエコナに鉄の槍で突かれ絶命した。

ひとまず戦闘も終わり、再度エルフの隠れ里へと足を進める一行。ハツキが落ち込んでいるのに気付いたリュカは、彼女に近付き声をかける。

「どうしたのハツキ？何か落ち込んでいる？さつきバギが効かなかつたから、落ち込んでる？」

「私…全然みんなの役に立つてない…」

「そんな事無いと思うよ。アルルが怪我したらホイミで治してるじやん！」

「でも、私じゃなくても…アルルだってホイミ使えるし、リュカさ

「なんかはベホイミを使えるじゃないですかー本職の僧侶の私はホイミしか使えないのに…」

「でも回復役は多いに越した事はないよーそれに僕を当てにしないで…常に逃げる準備で忙しいから」

「リュカは戯けて見せるが、ハツキは俯き表情は暗いま…」

「アルルのギラ、見ましたー? 本職のウルフと同じくらいの威力ですよー! それなのに…私のバギは…」

「あのねハツキ…アルルは勇者様なんだよ。何でも出来る…それが勇者様なんだよ」

「何でも…やっぱり私…いらないですよ…」

「何でも出来る人間つていうのはね、一人じや何にも出来ない人の事なんだ。」

「え! ? 何でも出来るのに?」

ハツキは顔を上げリュカの瞳を見つめる。

「うん。腕力はあるが戦士程じやない。素早く動けるが武闘家程じやない。攻撃魔法を使えるが魔法使い程じやない。もちろん回復系の魔法も使えるが僧侶程じやない。いいかいハツキ…落ち込むなとは言わない…でも『自分は役立たずだ』って落ち込んでも、何も解決はしないよ。それより『どうすれば役に立てるのか』って悩んだ方が有益だ!」

「……………私に、何が出来ますかね?」

リュカの言葉を聞いて、ハツキの瞳に輝きが戻る。

「さあ…僕には分からぬ…色々試してみるんだね…何か答えが出てくるよ」

人に聞く事では無い…自分の未来は自分で見つける!

リュカの答えは優しくも厳しい。

ハツキなりに答えを見つける事が出来る様、祈るのみである。



## ノアール（後書き）

珍しくリュカがまともな事を言つてますが、一応素面ですので驚かないで下さい。

## エルフの里

＜エルフの隠れ里付近の森＞

「なあ…俺達…迷つてないか！？」

「ウルフが額に流れる汗を拭いながら訪ねる。

「大丈夫、迷つてないよ。僕達は美女の群れに近付いてるよ」

「本當かよ！何だか同じ所をグルグル回つてる気がするけど！？」

「本當本當！だんだん美女の匂いが強くなつてるからね！」

「…なんだよ、それ…………じゃあ、その匂いを辿つてみてよ…もう疲れた…」

リュカの言い分に、心身共に疲れ切つたウルフが、やけくそ氣味に嫌味を言う。

「ようし！任せなさい！！」

だがリュカは、気にしないどころか率先して森の奥へ勝手に進んで行く。

置いてかれる訳にはいかないアルル達も、慌ててリュカの後について行く。

＜エルフの隠れ里＞

どんどん進むリュカの後を、見失わない様について行くと、急に拓けた場所へと出る事が出来た！

「…………本当に着いちゃつた…」

「だから言つたろ！美女の匂いがするつて！」

「何だよ、美女の匂いつて！？どんなんだよ…」

「そりやアレだよ！美人…つて感じの匂いだよ…」

リュカの説明になつてない説明で、ウルフはより混乱する…

そんな男一人を無視して、アルル達は村内へと入つて行く…そこは…

「ほ、ホンマに美女だらけやん…」

工コナが感嘆の溜息を吐く程、エルフは美人しか存在していない…

近くに居たエルフがアルル達の事に気が付いた。

「キヤー！人間よー！攫われてしまふわー！ー！」

エルフの少女が悲鳴を上げて腰を抜かす。

「攫つたりしないよ。触つたりはするかもしないけど」

リュカは腰を抜かした少女エルフに近付き、優しく立たせてながら

周囲を見渡すと、

立たせてもらった少女エルフも、慌ててその場から逃げ出してしまった……

やれやれ……『人間より強大な魔力を有する恐ろしい存在』ね……人

この世界の常識で生きてきたアルル達には、リュカの言い様には反感を憶えてしまう。

しかし、現実を垣間見てしまつた為、反論する事も出来ない。

「せ、… 言われ続けてたんだよ！」

と、子供じみた言い訳しか出来ないでいる。

「ま、いいや… そんな事より、女王様を捜しましょうか。一番でつかい建物に居るのがそうだよ。きっと…」

村内の一一番大きな建物の前まで辿り着いたアルル達。

門には10人の戦士風エルフが、剣を構えて進入を阻んでいる。

あ！間違ひなく此廻にお偉いわんが居るな！」

リエカは誰が見ても分かる事を言いながら、戦士エルフ達に近付いて行く。

「ちょっと女王様にお話があるから、退いてくれない？」

「人間が何の様だ！？」

戦士エルフのリーダー格の美女が、リュカの喉元に剣を這わせ言い放つ。

「あれ？君が女王様？」

隊長エルフの瞳を真っ直ぐ見つめながら話すリュカ。

「ち、違う！み、見れば分かるだろ？…女王様はこの奥にいらっしゃる」

リュカに見つめられ、顔を真っ赤にする隊長エルフ。

「僕達、女王様に大切なお話があつて来たんだ。お願ひだよ、お通りをさせてくれないかなあ？個人的には君ともお話をしたいんだけどね…」

喉元に剣が這つてゐ事を氣にもせず、隊長エルフの腰を抱き寄せ瞳を近付ける。

隊長エルフはどうする事も出来ないでいる…剣で喉を切り裂く事も、押しのけて逃げ出す事も、大声で助けを呼ぶ事も…ただリュカの瞳に心を奪われる…一人の女でしかない。

『人間達よ…入室を許可します…』

何処からともなく声が響く。

「…………どうぞ…お通り下さい…………ただ、女王様に無礼な事はするでないぞ！！」

女王の声を聞いた隊長エルフは、リュカの喉元に這わせてあつた剣を放し、通行を促す。

「ありがとう。君、名前は？」

優しく訪ねるリュカ。

「わ、私は…カリーザ…」

思わず答えるカリーザ…リュカの瞳から目を離す事が出来ないでいる。

「うん。僕は、リュカ。よろしくね」

そう言うと、カリーザの頬へ優しくキスをするリュカ。

最早、ただの恋する乙女であるカリーザを尻目に、女王の元へと歩み

出すアルル達。

カリ一はこの先どうなるのだろうか…

アルル達は謁見の間の様な空間に辿り着く。

間の前には玉座に座る美しきエルフが一人…

「貴女が女王様でしようか？」

「如何にも…私がエルフの女王です。…………して、人間…何用で此処まで参った？私達は、人間なんぞとは関わり合いになりたくない！サッサと出て行ってほしいのだが…」

不機嫌な表情の女王は不機嫌な口調で吐き捨てる。

「此処より東に位置する、ノアニールと言う村の呪いを解いて頂きたく、お願ひに参りました。」

アルルは可能な限り恭しく嘆願する。

「ならぬ！その村の男は我が娘を誑かし、エルフの秘宝『夢見るルビー』を盗ませた！断じて許す事は出来ぬ！」

「夢見るルビー…？そんな事は一言も言ってなかつたな？あのジジイ…」

「あの…私達はノアニールの村人に…難を逃れた村人に頼まれただけなんです…些か情報不足ですので、何が起きたのかをお教え頂けないでどうか？」

「主等に教えて何になる？娘を連れ戻せるのか？」

「はい。可能な限り尽力致します。」

「…………」

目を瞑り考えるエルフの女王…

「いいでしょ…」

エルフの女王は静かに目を開くと、10年前に起きた出来事を静かに語り出した。

・・・

エルフの女王の娘『アン』は、ある日森に迷い込んだ人間の青年に惚れてしまい、毎日の様に村を抜け出し、人間の青年と逢い引きをする様になる。

その事に気付いた女王はアンに『一度と人間の青年と会う事は許さぬ』と言われ、悲観に暮れてしまった。しかしアンは、エルフの秘宝を持ち出し、村から出て行ってしまった。

「……質問が一つ」

女王が話し終わるとリュカが手を上げ質問をする。

「何か……？」

「何故、娘の恋路に反対したんですか？」

「人間なんぞ粗野で度し難い生き物！そんな生物との愛など許せる訳がないであろう！」

「それはエルフ族の総意？」

「そうです！エルフ族は人間と違い、同族同士で喧嘩合い殺し合うなどと言う事はしない！比べものにならぬ程高等な存在です！」

「つまりアンタは、母親であることより、女王である事を選んだ訳だ。見た目美人だが、最低なブスだな！」

リュカは苦々しく言い放ち、唾を吐き捨てた。

「な、何だと……」

エルフの女王は怒りに体を震わせる。

「アンタの娘だつて人間という存在については聞いていただろう。それでも人間に恋をしてしまったんだ！だがアンタは、その人間がどういう人物か知ろうともしてない。もし娘の幸せを願うのなら、娘の恋の手助けをしても良かつた！『人間』という全てではなく、その『人間の青年』個人の事を調べ、娘を幸せにする事が出来るか確認すれば良かつたんだ。反対するのはその後でも間に合つ。」

「そ、それは……しかし、人間は多くの残虐行為を行つてきた歴史が

ある！」

「それは全人類が行つた行為ではない！過去の…極めて少数の人々が犯した過ちだ！じやあ聞くが…今までに産まれたばかりの赤ん坊が居るとする。その子は極悪人か！？」

「……いや…違つ…だが、何れ悪事を働くかもしない！」

「じゃあ、その赤ん坊がこの村に迷い込んだらどうする？殺すか？言つておくが、赤ん坊を村から追い出したらすぐに死ぬぞ。殺したと同じ事だぞ！」

「産まれたばかりの赤子ならば、我らの手で育てる。赤子に罪はない！」

「では、その子が成長しアンタの娘と恋に落ちたらどうする？人間だから反対するか？何れ大悪人になるかも知れないから拒絶するか？」

「我らが育てなのだ！悪事を起こす訳がない！反対などせん…！」

エルフの女王は立ち上がり、リュカをきつく睨み付ける。

「その通りだ！育つてきた環境によつて人間は変わる。優しい人には優しくするようにと言われ育つたのなら、他者を傷つける様な事はしない人物になる。その青年だつてそうかも知れないだろう！それを調べもしないで決めつけた！エルフの女王という立場だから、娘が人間と仲良くする事を許す訳にいかなかつたんだ！アンタは娘より、自分が大切だつたんだ！」

リュカの言葉に力無く腰を下ろす女王…

「……貴様に…何が…分かる…」

「分かるさー僕にも娘が居る。もう嫁いでしまつたけど…初めて僕の前に彼氏を連れてきた時は、ぶん殴つてやろうかと思つたけど、娘が…ポピーが悲しむからやめた。でも、やつぱり腹立つからね、ちよつと嫌がらせをしてやつたんだ。そしたら、その男真に受けちやつてね…本当に危険な地域に赴いて、魔族を倒して来ちゃつたんだ。そして娘との仲を認めて貰つ為ならつて、僕にまで攻撃してきた…これ程ポピーの事愛してるなら、これ以上反対できないでしょ

う…結婚式では凄く幸せそうだったよ

リュカは嬉しそうに娘の事を語る。

それを見た女王に言葉は無い…

ただ俯き、出て行くようにと手で合図する

エルフの宮殿を後にしたアルル達は、エルフの隠れ里の出口を田嶋  
し歩き出す。

「リュカさんの娘さんて、もう結婚してたんだ」

「何だウルフ？僕の娘を狙つてるのか？まだ居るぞー！」

「別にそんなんじゃないよ！ただ、どんな人なのかなと思つて…」

「うん。外見は母親似でものつそい美人だよ。性格は僕に似てるつ  
てよく言われる。あそこまではつちやけてはいないつもりだけどな  
あ…」

アルル達は想像をして震え上がった

リュカの様な性格の女が居る事に…

そんな女の存在に…

## 傳い命、強固な愛

＜エルフの隠れ里付近の森＞

「しかし探すとしても何処を探します？10年も前の事ですよ！何処か別の土地に渡つてしまつたかもしませんし…」

ハツキの嘆きにエコナも同調する。

「そやで！もうまつといでロマリアへ戻りましょ。そない義理を尽くす必要ないやん！」

「そんな訳いかないわ！イノックさんと女王様に約束してしまったんだから」

「うん。それに、そんな遠くには行つてないよ。この森を探せば、一人ひつそりと暮らして居るよ」

「リュカさん、この森に居るつてどういう事…？何でそんな事言い切れるの？」

ウルフだけでなくアルル、ハツキ、エコナもリュカの言葉に興味を持つ。

「うん。それはね…あのジジイが言つてたじやん。『1週間たつても戻る気配がなく、心配になり近隣の村や町を探し回つた』って…しかも2ヶ月間も探したみたいだし。自分の息子の事だからね…そりや真剣に探したんだと思うよ。それなのに足取り一つ見つからなって事はだ…近隣の村には近付いてもいなって事だよ。なんせエルフは人間達におそれられてるからね。何処にも行く事なんて出来ないよ」

リュカの説明に納得する4人。

「ほな、この森全体を探さなあかんやん！何日かかる事やら…」

「人間が生活する以上、住処から一步も出ないで生きて行く事は出来ない。食料調達等であつちこつち歩き回つてゐるはずだから、そんなに大変じやないよ」

そう言つとリュカはサッサと森の奥へと入つて行く。実を言つとアルル達は、この森に入つてから方向感覚を無くしているのだ。

その為、リュカとはぐれると遭難してしまつ恐れがある。みんな慌ててリュカについて行く。

暫く森の中を彷徨つと、湿っぽい雰囲気を醸し出す洞窟が口を開けてるのを発見した。

「さすがにこの中には居ないだろ。」

「甘いなウルフ君。あの二人は誰にも邪魔されない所に行きたいんだ！エルフはもちろん、人間さえも絶対入つて来ない洞窟…完璧じゃないか！」

若者4人は不満げだが、リュカがドンドン進んで行く為、ついて行かざるを得ない…

＜ノアニール西の洞窟＞

此処は有り触れた洞窟だ…

湿氣とカビ臭さとモンスターの気配…

テンションの低い4人を励ます為に歌うリュカ。曲曰はジュディ・オング『魅せられて』。そして案の定4人は戦闘を強いられる。

一行は幾度も勝利を重ねながら、洞窟内を奥へと突き進む。

目の前に奇妙なモンスターが現れた。

まるでキノコのお化け…『マタンゴ』である。

3匹のマタンゴは一斉に『甘い息』を吐き、それを吸い込んだアル達は簡単に眠り着いてしまった！リュカ以外…

「あれえ…みんなお疲れでしたか？これってピンチじゃん！」

危機感など感じていないリュカは、ドラゴンの杖でマタンゴを一掃！  
眠れる美少女3人と居眠り少年1人を担いで、更に奥へと進んで行く。

く。

最初に目を覚ましたのはアルルだった：

周囲を見回すと、そこは美しい地底湖の畔…

そして少し離れた所にリュカが佇み、何かを読んでいる。

慌てて他3人を起こすアルル。

それに気付いたリュカがアルルに手紙を手渡した。かなり古い手紙だ：

その手紙には【お母様。先立つ不幸をお許し下さい。私達はエルフと人間。この世で許されぬ愛なら…せめて天国で一緒にあります。

アン】と…

「これって…」

「…エルフの女王の娘…アンの最後の言葉だ…その宝箱に、ルビーと短剣…それとその手紙が入つてた…」

リュカの頬を涙が伝つ…

リュカだけではない…皆、涙がこぼれ出る…

「様子を見守るだけで良かつたんだ…誰でもいい、エルフでも人間でも…親が意固地に反対しなければ…そうすれば…死ぬ事なんて…」

「帰りましょ…そして女王様とイノックさんに伝えないと…」

アルル達は洞窟を後にする…沈痛な面持ちで。あのリュカですら…

＜エルフの隠れ里＞

アルル達は再度エルフの女王の宮殿へ赴いた。

入口にはカリーザの姿がある。

「リュ、リュカ…また来たのか…もう、女王様には会わせぬぞ！」

リュカは悲しい表情のまま、懐から古びた短剣を取り出しカリーオに見せる。

「これ…君のだろ…君の名前が彫つてあるよ…アンに渡したのかい？」

それは洞窟でアンの手紙と一緒に入つてあつた短剣だ。

「こ、これは！？私がアン様にプレゼントした『聖なるナイフ』だ！ど、何処でこれを？」

リュカは事の顛末をカリーオに話した…

「そんな！アン様が…（うつ）…アン様が…！」

カリーオは短剣を抱き締め、泣き崩れた。

そしてリュカ達は女王の元へと歩み出す。

「また来たのか！？不愉快な人間め！」

不快感を露わにする女王に、アルルは夢見るルビーを差し出す。

「そ、それは！？いつたい何処でそれを？」

リュカは黙つて手紙を渡した。

女王は手紙を読み始めると、体を震わせて泣き出した…

「私が認めなかつたばかりに…私が…（うつうつうつ）…アン…ごめんなさい…アン…！」

ただ黙つていることしか出来なかつた…

女王を責める事も、慰める事も出来ず…

リュカ達は目を伏せ、一緒に悲しむ事しか出来なかつた…

「世話になつたな人間よ…いや、リュカと申したな。カリーオから聞

いたぞ」

「……ノアーネルの件ですが…」

「うむ。これを持って行くが良い」

リュカは女王より、粉末の入つた袋を受け取つた。

「それは『目覚めの粉』よ。その粉を風に乗せてノアーネルに撒けば、呪いの効果は消え去り、皆目覚めるでしょう」

「ありがとうございます」

「それと、今宵はこの村に宿泊してゆきなさい。もつ夜も遅い…もてなす事はしませんが、寝床を一晩提供しましょう」

女王の突然の提案に、驚きを隠せないアルル達。

しかしリュカだけは驚いた風もなく、優しく礼を告げる。

「ありがとうございます。女王様」

そのリュカの一言に、顔を真っ赤に染めて女王が咳く。

「べ、別に…人間を許した訳ではありませんから…」、今回の事への感謝の気持ちですから！」

これは、もしかしたらシンデレラというヤツでしょうか？

今後のエルフ族の未来が心配です。

儚い命、強固な愛（後書き）

一人のエルフの心を魅了したリュカ！

そして夜は更けて行く…

今宵、リュカの隣で寝息を立てるのは果たして誰か…？

女の戦いが今始まる！

闘技場でモンスター同士を戦わせるより、じつちの方が面白そうだ

！

## 目覚め

＜エルフの隠れ里＞

まだ夜も明けきらぬ前に、リュカの寝ている部屋の前に集まる4人。エルフ達を刺激せぬ様、早めに村から出て行く為、身支度を調えたのだが…案の定リュカが起きてこないのだ…

「なあ…リュカはんの事や、誰が女を連れ込んだんやないか？」  
「連れ込むつて…エルフしか居ないのよ！？」

「カリーって女戦士じやないか？剣を突き付けておきながら、抱き寄せられてたぞ！」

「女王様もリュカさんの笑顔で虜になつてた様に見えましたよ…」  
ヒソヒソとそんな話をしていると、リュカが部屋から静かに出てきた。

「あれ？みんなどうしたの？」

すぐに扉を閉めた為、中を確認する事は出来なかつた…

「リュカさん…中に誰か居るんですか？」

「……そんな事を聞く必要ある？」

リュカは昨晩の事を教えるつもりはない様だ。

「世の中には知らないいい事もあるんだよ。それが大人になるつて事だよ。諸君！」

リュカは4人を部屋から遠ざけ、退村を促す。

エルフ族と人間との間でトラブルが起きぬ様、祈るしかないだろ…

＜エルフの隠れ里近郊の森＞

「ハツキ…」

リュカはエルフの隠れ里よりノアーネルへと向かう道中、ハツキに

声をかける。

「はい、何ですかリュカさん？」

「これ…カリーカから貰つたんだけど…ハツキが使ってよ」

そう言つて手渡されたのはアンが使用してた聖なるナイフだ。

「こ、これって！？アンさんの形見じや…！？」

「うん。カリーカに渡したんだけど、僕等が役立てた方がアンも喜ぶからつて…」

「で、ベットの中で渡されたんですか？」

「…イツテルイミガワカリマセン」

「…」

ジト目で見つめるハツキ…

視線を合わせないリュカ…

「ふう…そうですね、アンさんの為に私が使用させてもらいます」

「ありがとう」

「でもナイフだと攻撃範囲が狭いから、素早く動ける様に特訓しないと…」

「うん。僕も手伝つよ」

リュカの笑顔と一緒に特訓と言つゝ褒美に、昨晚の事などどうでもよくなつてしまふハツキだった。

〈ノアール〉

アルル達が村へ入ると、奥の方からイノック老人が小走りで近付いてくる。

「おお…アルル殿！エルフの女王には会えましたか？」

側に立つていたリュカとは視線を合わせず、アルルとだけ話を進めれる。

「はい。呪いを解く方法入手にも成功しました…」

「なんと…！…ありがとうございます！では、早速…」

「アンタ、自分の息子の行方はどうでもいいのか？」

冷たい口調でリュカが問う。

「いいわけない！……だが、探しようがないのだ……足取り一つ掴めなかつたのだから……」

イノック老人は怒りと悲しみの目で、リュカを睨み付ける。

「何処か別の地で、一人幸せに暮らしていると思い、祈るしかないだろう……」

「僕達は足取りを見つけました……」

「……本當ですか！？そ、それで何処に……！？」

イノック老人は驚き、縋る様な表情でリュカに詰め寄る。

「…………」

だがリュカは答えない……アルル達も答える事が出来ない。

「…………ま、まさか…………」

「…………この世じゃ添い遂げられないと悟り、一人天国で幸せになる為に……」

「そ、そんな……（うつうつ）……」

リュカの言葉を聞き、両手で顔を覆い泣き崩れるイノック老人。

「……貴方が……せめて貴方だけでも味方をすれば……父親である貴方が、自分を犠牲にしてでも守つてやれば……」

リュカは懐から、目覚めの粉を取り出し空中へばらまく。

粉は風に乗り、村の隅々まで行き渡る。

すると、其処彼処から人々の声が聞こえだした！

「ジイさん……村の人達への説明はアンタに任せる。呪いで10年間眠り続けた事を、伝えるか伝えないかは……伝えれば、きっと皆怒るだろう！呪われる原因を造ったアンタの息子と……そしてアンタ自身も……責められるだろう……」

リュカ達は泣き崩れるイノック老人を尻目に、その場を立ち去った。心身共に疲れた為、今日は宿屋で休み、ロマリアへ帰るのは明日にすることに……

村中の人々が、荒れ放題の村を見て驚いている…

そんな中、アルル達は宿屋へ赴く。

数日前に勝手に宿泊した為、アルルは少し後ろめたそうだ。

「あ、あの…5人一晩なんですが…大丈夫ですか？」

「もちろんとも！5人で25ゴールド。…ただ少し待つでいい。何故だか客室が荒れててね…急いで片づけるので時間をください。」

「ぜ、全然大丈夫です！どうぞ」ゆつくり…」

客室を荒らしたのは、数日前のアルル達…

そんな事知らない店主は、慌てて2階へ行き部屋を整える。その間、アルル達はロビーの椅子に座り待つ事に…其処には一人の若い女性が物思いに耽っていた…無論リュカがスルーするわけもなく、口説き出す。

「お嬢さん、何か悩み事ですか？僕がご相談に乗りますが…ベットの中です」

この男、何時もこんなストーレートなんですかね？

「ありがとう…私、失恋しちゃった…」

女性は少し微笑むと、悩み事を語り始めた。ベットの中ではないけれど…

「昨晩、あんなに愛し合ったのに…今朝起きたら居なくなつてたの、彼…」

「けしからんヤツだ！貴女の様な美しい女性を、黙つて捨てるなんて！何てヤツですか！？出会つたら『コピンしてやりますよ！』

「ふふふ…面白いのね、アナタ。」

「ありがとう。僕の名前はリュカ。ベットの中では、また違つた僕をお披露目出来ますが…」

「私はジェシカ。そして私を捨てた男はオルテガ…もし、出会つたら『コピンをよろしくね』

「あの…も、もう一度…男性の名前を…」

アルルが立ち上がり、ジェシカへと詰め寄る。

「え！？ええ…オ、オルテガよ…そ、それが何か…」

「ねえアルル…もしかして…あ「それ以上言わないで…」

ハツキの言葉を遮り、考え込むアルル。

オルテガ…それは10年前に魔王バラモス討伐の為に、アリアハンから一人で旅立ち、そして散った男…しかもアルルの父親の名前である！

アリアハン出身のハツキとウルフは、その事を分かっている為、アルルを気遣い心配そうに見守っている。

そんな事知らないリュカは、ジェシカを口説き相部屋の了承を得ていた。

「皆さん、お待たせしました。お部屋のご用意が整いました。どうぞおくつろぎください」

リュカのナンパが成功したタイミングで、店主が2階から下りてきた。

リュカだけが女性を伴い、部屋へと消えて行く…

暗い表情で部屋に入るアルル…

他の3人は、戸惑いながらも旅の疲れを癒す為、各々の部屋へと入つて行く。

翌朝、あまり眠れなかつたアルルは、皆が起きる前にベットから起き、村内を散歩する事に…

其処には、既に起きていたリュカが小鳥達と戯れている。

父親と関係を持った女性と、昨晩関係を持った憧れの男性…リュカ。アルルの気持ちは複雑になり、リュカにどの様に接していいのか分からぬ。

「おはようアルル。どうしたの、元気ないね？何か相談事があるなら聞くよ

「……オルテガとは…私の父なんです…」

「オルテガ? 誰?」

さすがにイラつくアルル。

「昨日出会った、ジェシカさんが言つてた男です!」

「……ああー、ジェシカさんの元彼ね! へー、さすがアルルのパパさん。趣味が良いね!」

「（イラ）趣味がどうとかじゃないです! 父は私やお母さんを置いて、旅だつたんですよ! それなのにこんな所で浮気をして…」

「イヤイヤ、浮気じやないよ。ジェシカさんから聞いた話では、モンスターに襲われている所を、オルテガさんに助けられて、惚れちゃつたジェシカさんが、お礼と称してベットで迫つたんだって。まあ…もちろん、据え膳食わねばつてヤツで、やる事はやつたみたいだけど…」

「同じですよ! お母さんを裏切つてるじゃないですか!」

「男なんて、そんなもんだよ…」

「父はお母さんの事など愛してないという事ですか? リュカさんもそうなんですか! ?」

アルルは泣いていた。

リュカは優しくアルルを抱き寄せ、その場に座ると膝の上にアルルを座らせ宥めながら話す。

「アルルのお父さんは、お母さんの事を愛してるよ。」

「何でそんな事言えるんですか!」

「大好きな人の為に、世界を救う旅に一人で出たんだ! お母さんの事を愛していなければ出来ないよ。」

「じゃあどうして…」

「男つてのはね、欲求を止められないもんなんだ! 人によつて処理の方法が違うだけで、皆同じなんだよ。」

「処理の方法?」

「そ! 自分の手を使う人もいれば、僕みたいに女性をナンパする人も居る」

「そんな身勝手な！」

「身勝手だねえ…僕もビアンカの事を愛してるよ。この世で一番…でも、身勝手なんだ…困ったねえ」

「男の人はズルイです！そんな人、嫌いです…身勝手じじゃない眞面目な人が私は好きです。」

「うーん…じゃあアルルには、僕の息子がお似合いかな？」

「ティミーさんですか？眞面目なんですか？」

「うん。父親とは正反対！」

「そうですか…会つて見たいですね…」

「そうだね、年頃もアルルと同じくらいだし…バカが付ぐぐらい眞面目だからね。もてるのに、摘み食いしようとしないんだ。男としてどうなの？って思つよ…」

「……（スー）…（スー）……」

氣付くとリュカの腕の中で寝息をたてるアルル。

少しだが心の蟠りが解け、安心してしまったのだろう。リュカが優しく抱き上げ、宿屋までアルルを運ぶ…

どうやら今日の出立は、遅くなりそうだ…

&lt;ロマリア&gt;

「おお…さすがは勇者一行…よぐぞ取り戻してくれた！」

アルル達はロマリア城へ入るなり、謁見の間まで急かされる様に通され、今は王様よりお褒めの言葉を賜っている。

「お褒め頂き恐縮です。しかしカソダタ本人は逃してしまいました…申し訳ございません」

「よいよい…女性を助ける為に己むなしと聞いてある…」

「随分と詳しいツスね！？見てたんですか？」

リュカの不躾な質問に、王は笑つて答える。

家臣の方々は不愉快極まりない顔をしている。

「お主等が助けた女性から聞いたのだ。窓の外に縛り吊されてた者だ。憶えておるだろ？」

「お元気ですか？」

「うむ。お主に感謝しておつたぞ…」

リュカは嬉しそうに頷く。

「……褒美の件だが…話をまとめると、リュカ…お主一人の力で、なし得た様に思えるのだが…」

「そんな事ないツス！みんなの協力でなし得た事ツス！」

「殊勝な事だ。だが、お主が盜賊団を壊滅させたと、報告がきておるのだよ！」

「その通りです陛下！私達は一緒にシャンパニーの塔まで行きましたが、何も出来ずにいました！彼一人の功績です！」

珍しくリュカが辟易している事に、アルル達は少し楽しんでいる。

「ではリュカに褒美を取らせよう！」

ロマリア王は嬉しそうに立ち上がり宣言する。

「リュカ！お主にロマリア王国の王位を譲りうつぞ！」

「あ、！？何言つてんの？大丈夫？」

アルル達も臣下の者達も言葉が出ない中、リュカだけが無礼極まりない発言をする。

「うむ…もうちょっと分かりやすく言つとどだな…リュカ、お前が王様つて事だよ！わつはつはつはつ！」

「陛下ーー！何を仰います！？王位をこんな下賤な旅人にやるなど！」

「私の見る目に間違いはない！リュカならこのロマリアを良い国にしてくれる！」

「し、しかし…」「これ以上臣下の身で文句を言つのなら、相応の罰を与えるぞ！」

罰と聞き黙り込む臣下の人々…

「ちょ、待て！ラ！僕はOKしてねえーぞ！」

100%不敬罪です。

「何だリュカ…断る理由はあるまい！王になれるのだと？」

「自由気ままな旅人と制約いっぱいの王様…ううん、僕迷っちゃう。つて、ちげーよ！嫌だよ、断る！誰が王になんぞなるか！」

「何ゆうてんの！？王様やで！！絶大な権力やん！」

「あのねエコナ…権力には責任が付いて来るんだよ…権力が大きければ大きい程、責任も大きくなる。自由気ままに生きる方が幸せなんだよ！」

「益々気に入った！お主は王の有り様を心得ている…やはり私の目に狂いはない！リュカよ、お前にこの国を任せたい…是非、王になつてくれ！」

(現)ロマリア王はリュカの元まで近付き、両手を握り締めて王位継承を進める。

「絶対ヤダ！冗談じやない、今僕は幸せなんだ！その幸せを手放して堪るか！自由こそ我がライフルタイル！」

(現)ロマリア王の手を振り払い、自己の生き方を力説するリュカ。

「…………どうしてもダメか？」

「こつこつおっさんだな！王になつて良い事なんか一つもない！」

最早誰も言葉遣いを注意しない。

「…………仕方ない……諦めるところが……だがリュカよ！何時でも代わつてやるぞ！自由に飽きたら何時でも来い！」

ロマリア王はこちやかに玉座へ戻る。

「飽きないよ！」

「では、他に何か欲しい物はあるか？何も褒美をやらない訳にはいかぬのだが……」

「アルルは何か欲しい物ある？」

急に権利を譲られ戸惑うアルル。

「…………そ、そうですね…………あの、可能なら船を頂けますか？今後の旅に必要になると思うので……」

「ふむ……船か……我が国にも無いわけでは無いのだが……我が国の船では、お主等の役には立たんよ」

ロマリア王の言い分では……

船、1隻で大海原へ出ても、海の強いモンスターに沈められるのが落ちである。

船団を組んで航海するのなら何とかなるが、1隻では船体が丈夫でないと、意味がないと言つ。

「そう……ですか……」

「ただ『ポルトガ』なら、造船技術が発達してある故、強固な船を造る事が出来るであろう」

「ではポルトガへの通行許可を頂けますか！？」

「それには及ばぬ！もう既にお主等はフリーパスだ！ロマリアから何処へ行こうが、私に許可を取り付ける必要はない。だが困った事に、ポルトガへ通じる関所なんだが……」

歯切れの悪いロマリア王。

「何か問題でも…」

「…………鍵が無い…」

「は？」

「モンスターが蔓延っていたのでな…関所の門を閉めてしまったのだが…鍵を無くした…まあ、モンスターの行き来を阻害する為に閉めた訳だから、いいかなと思つて合い鍵を造つて無い…壊されると困るのだ。鍵を開ける事が出来たのなら、自由に通行してくれ！」結局、アルル達はロマリア内フリーパスの権利以外、何も貰えなかつた。

むしろ問題が山積して行く事に、リュカ以外が頭を悩ます…

「どうしましょう?」

宿屋へ戻つた一行は、いつもの様にリュカの部屋で作戦会議を行つていた。

「ナジミの塔で貰つた、盗賊の鍵じゃ開かないかな?」

「やつてみてもいいけど、開かなかつた時の為に別の方法も考えとかないと…」

ウルフの提案にアルルは難色を示す。

関所を閉める様な鍵だ。

簡単な造りの訳が無い。

「じゃあ、どうすんのやー?」

「「「…………」」」

誰も何も思いつかない。

堪らずアルルはリュカに頼る事に…

「リュカさんは…何か打開策がありますか?」

「うん。『魔法の鍵』を探しに行こうよ。『イシス』って国にあるらしいから

「何でそんな情報を持つてんだよ！」

愚問である。

「ジェシカさんから聞いた。ジェシカさんは元彼から聞いたらしい。

その元彼が探しに行つたみたいだよ」

アルルの顔を歪る…

「また女かよ…」

皆、呆れ顔だが他に何も思いつかない為、リュカの情報を頼りにイススヘと向かう事となる。

先ずは『アツサラーム』へ向けて…

別世界より？

「ラインハット」

ラインハット謁見の間に、特使として訪れたティミーが傳いている。  
「おいたイミー！ そんな他人行儀に畏まるなよ！」  
「いえ、そう言うわけには参りません。私はグランバニアの特使として参りましたので…」

相変わらずバカ真面目である。

「アンタそんなんだから彼女が出来ないのよ…もう少し柔らかくなりなさいよ。男が堅いのは一部分だけでいいのよ！」  
『この女の』こう言う所が嫌いだ！ 公式の場という事を理解してゐるのか…？』

イラつきポピーを睨むティミー。  
楽しそうに微笑むポピー。

この二人は双子の兄妹である…これでも…  
「まあまあ…それでティミー君、どのような用件でいらしたのです？」

国王のデールが場をまとめた。

・

「相変わらずトラブルに巻き込まれる男だな…」

ヘンリーが笑いながら感想を述べる。

「ヘンリー様！ 笑い事ではございません！ 我が国は現在、国内に敵が多数存在します。ラインハットのご助力が無ければ、我がグランバニアは窮地に陥ります」

「貴族から税金を取るからだ。貴族ってのは気位だけは高いからな」  
ヘンリーの笑いは止まらない。

「ぶつ殺しちゃえればよかつたのよー! 挙兵した時に…」

ポピーが笑顔で物騒な事を語つ。

「まあ… そう言つわけにもいかなかつたのだろう…」

さすがに引くヘンリー…

「(「ホン) 分かりました。我がラインハットは可能な限りグラン  
バーをご支援致します」

デールの力強い言葉に、ひとまずは安堵するティミー…

そして表情を切り替え、もう一つの難題に立ち向かう覚悟を決める…

「さて… ラインハットのご協力を得た所で、ポピーに頼みがあるの  
だが!」

ティミーの言葉にポピーの瞳が輝く!

「何? 何? 何? 何? 愛しのお兄様が私にお願いつて? 『童貞捨て  
たいから体かせ』とか言つちゃう! ? やだ、ちょ~楽しみ…」

イライラするティミー、ワクワクするポピー。

拳を握り締め、怒りを我慢しつつ話を続ける。

「父さんを助け出すのに、協力をしてほしいんだ!」

少しキレ気味のティミー。

「あ、! ? 何言つてんの? わざわざ改まつて言つ事? 言われなくて  
も協力するつもりよ私! この後サンタローズへ行くんでしょ! ? そ  
してマーサお祖母様と一緒にグランバーをに戻るんでしょう…? 私は  
そのつもりよ」

完全にキレるポピー。

「あ… ああ、よろしくお願ひしたい…」

「あのねえティミー… アンタだけのお父さんじゃないのよ。私にと  
つても大切なお父さんなのよ!」

「うん。ごめんね… ジャあ、早速サンタローズへ行こう!」

少し自分の妹を侮つていた事に、反省する…

「ちょっと待つて! 着替えてくるから… あー私の着替え… 見たい  
?」

「本気でどうでもいいから、早くしてくれ!」

やはりポピーはポピーだ。

ティミーはもう一人のトラブルメーカーと共に、サンタローズへと向かう。腹に穴が空く思いをしながら。

### 〈サンタローズ〉

「あらティミー君、いらっしゃい。残念ながらリュリュは出かけてるわよ」

ティミーとポピーはサンタローズに着くなり、シスター・フレアに出会いリュリュ不在を聞かされる。

「残念ねえ、ティミー！もう帰る？」

『コイツ、弟だつたら絶対殴つてやる』

「今日はマーサ様に用がありまして……」在宅ですか？

「ええ、マーサ様な……」

ティミーはシスター・フレアと別れ、サンチョ夫妻と共に暮らす祖母の元へ赴く。

「ティミー様、ポピー様！お久しぶりです。…………ティミー様、リュリュちゃんなら」不在ですよ？

サンチョがティミーの来村を不思議そうにしている。

「何で僕がサンタローズへ来ると、リュリュ田舎と思われるの？」

？

「事実だからでしょ！」

ティミーの憤慨に爆笑しながら答えるポピー……

「あら？ ティミー、ポピー……いらっしゃい。…………でもリュリュちゃんは今村に居ないのよ……」

そこに2階から下りてきたマーサも、リュリュ不在を伝える。

「…………いえ、今日はマーサ様に用がありまして……」

「まあ、私に……何かしら……リュカの行動なら止められませんよ」

実の母親にこんな事を言わせるとは…

「実は…」

「あの子は飽きの来ない人生をおくつでますね…」

これまでの状況を聞いたマーサは呆れるばかり…

「それで私の異界へのゲートを開ける力が必要と…しかし、私の力は魔界の門を開ける力…今回役に立つかどうか…」

困り顔で答えるマーサ。

「父さんが言つてました！『行動する前に諦めるのは愚か者だ』ともかくグランバニアへ来て頂けませんか？あの不思議な本を調べれば、何か分かるかもしません』

「行動する前に諦めるのは愚か者ですか…良い言葉ですね『お祖母様。お父さんは女性を口説く時に、その言葉をよく使つてましたわ。『口説くだけ口説いて断られたら、諦めればいい。行動する前に諦めるのは愚か者だ』って？

「なるほど…あの子らしいですね…」

「因みにティミーは、行動する前に諦めるのは愚か者よ。口説こうともしない！」

ポピーの言葉に辟易しているティミーが答える。

「リュリュは妹だ！口説く気は無い！当たり前だろ…」

「あらあら…別にリュリュの事ではないのですが…やっぱり忘れられないんじょ？」

「ひら、ポピー！ティミーが可哀想でしょーあんまりからかわないの…」

「は～い。ところでリュリュは何処へ行つたの？」

ティミーも行方が気になる様で、マーサの答えを待つていてる。

「確かにリュカに教わつて、ルラフーンって町に行つたみたい…何か特殊な魔法を憶える為だつて…」

「特殊な魔法…？何かしらね！？」

「父さんは色々な事知ってるなあ…ルラフーンかあ…どんな所だろ？」

「……………ああ、こいつしても始まらないわよ…グランバニアへ行きましょ。困った息子を連れ戻す為に！」

ティミーはポピーとマーサを連れ、ポピーのルーラでグランバニアへと戻る。

リュリュに会えなかつた事を、非常に残念に想いながら…

別世界より？（後書き）

みんなのアイドル、ポピー様が久しく登場！！

『こんな素敵な妹が居て、ティミー君が羨ましいですよね！

とにかくで…『ついにアッサラームだ！はつちやけフェスティバル！

！』を期待されていた方には『ごめんなさい。

楽しみは次話に持ち越しです。

「ロマリア」「アッサラーム」

アッサラームへと続く大草原に響く歌声…『カントリーロード』を気持ちよさそうに歌うリュカ。

モンスターの一団に襲われ、戦闘を余儀なくされるアルル達…

「ふう…俺達結構強くなってきたよな!」

戦闘を終え、ハツキのホイミで傷を癒しながらウルフが感想を述べる。

「そうね…戦闘回数だけは多いもんね…そりや強くもなるわよ!…アルルは、まだ歌い続けているリュカに嫌味を言つたが、気にする様子は微塵もない。」

「あ、ある意味リュカさんのお陰で強くなってるんですね!…私達の為に歌つてるのかな?」

自分の歌に浸つているリュカを4人が見つめる…

「…そんなわけないだろ!…?」

ウルフの意見が満場一致で可決された。

「アッサラーム」

まだ夕方と呼ぶには早い時間、アルル達はアッサラームへと辿り着いた。

一行は何時もの様に宿を確保し、町へと繰り出し旅に必要な物を購入する。

幾つかの店を見回ったアルル達は、1軒の店で足を止める…

「おお、私の友達!お待ちしておりました!売っている物を見てい

つて下さい！」

店内へ入つた途端、度を超えた愛想の良さで話しかけてくる店主…

「と、友達つて…私達の事？」

「そうです、そうです！皆さん、私の友達！」

「イエ～イ！僕達友達！友達価格で売つてちょ～だい！」

「はい、私と貴方、友達！買つていってちょ～だい！！」

店主と一緒にしゃぐリュカ。

そんな中、売つている物を見るアルル達。

「結構良い物を売つてるわね…」

「この杖…『魔道士の杖』か！？」

ウルフは1本の杖を手に驚いている。

「おお！さすが友達、お皿が高い！24000ゴールドです。お買  
いになりますよね！」

「に、24000ゴールド…？買えるわけ無いだろ…！」

「おお、お客様さん。とても買い物上手。私、参つてしまっています。で  
は、12000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょ？」

「おいおい、いきなり半額かよ…」

リュカが小声で突つ込む。

「それだつて高いよ！」

「おお、これ以上まけると、私大損します！でも貴方友達…では、  
6000ゴールドに致しましょう。これならいいですか？」

「おお、友達！僕達にはこの杖が必要。友達を救うと思って、もつ  
と安くしてえ！」

リュカが調子に乗つて値切り出す。

「おお、貴方酷い人！私に首吊れと言いますか？分かりました。で  
は、3000ゴールドに致しましょう。これならいいでしょ。」

当初の8分の1に値さがつた魔道士の杖…

「おお、僕達モンスターと戦うのに、この杖が必要…それなのにこ  
んな高値で売るなんて！アナタこそ僕達に死ねと言いますか！？」

リュカが楽しそうに値切り続ける。

「そ、そんなつもりは…わ、分かりました…1500ゴールドで…どうでしょう…」これ以上は安く出来ませんよ…」

店主の口調が変わり、表情も引きつっている。

「おいおい！僕達友達だろ！アナタが最初に言い出した…友達だったら、もっと安く出来るよな！？」

リュカは満面の笑みで店主の肩を抱く…ただ、声のトーンが笑って無い！

「し、しかし…私にも生活が…」

「僕達には旅が待っている！旅先では危険が付き物だ！折角出会えた友達だが、今日で最後かもしれない。そんな友達を見捨てるなよ！…安くできないのなら、その『マジカルスカート』を、オマケにつけてよ。いいよね！」

「…………そ、それは…………」

「と・も・だ・ち・だろ！…！」

半ば脅しである。

「分かりました…魔道士の杖とマジカルスカート…1500ゴールドです…」

店主が力無く承諾する…しかしリュカの攻撃は止まらない！

「おお、友達！ありがとう、さすが友達！じゃあ、はい。1500ゴールド！杖とスカート3着貰つて行くよ…」

「さ、3着！？な、何で3着も！？」

「だって女の子3人居るんだよ。3着必要でしょ！じゃあ友達！またね～」

「に、2度と来るなー！！！」

店主の悲痛な叫びが店内に木霊する。

「ほらウルフ。大事に使えよ！」

店から少し離れた所で、先程の戦利品をみんなに配るリュカ。

「しょ、商人顔負けの値切りっぷりやな！店のおっちゃんに同情し

「もうたわ！」

「魔道士の杖とマジカルスカート3着を、鉄の槍より安く買うなんて…リュカさん買い物上手！」

「最初に吹っ掛けってきたのはあつちだ！」

「それにしても、やつぱ凄いなリュカさんは一勉強になるよ」

「羨望の眼差しでリュカを見るウルフ。

「さあ、取り敢えず買い物は済んだでしょ？ 一旦宿屋へ戻ろうよ。お腹空いちゃつた」

アルル達はリュカの希望で宿屋へ戻る。

少女3人は、リュカがくれたスカートを穿き、宿屋1階のレストランへ現れた。

「ど、どうですか…似合います？」

少し恥ずかしそうにハツキが訪ねる。

「このスカート、防御力があるのね…この先、重宝するわ！」

照れ隠しをしながらアルルが喜ぶ。

「戦闘で激しく動いたら、パンチラし放題やな…リュカはん、それが目当てなん？」

リュカの前で一回転してエコナが可愛く微笑む。

「うん。僕の思った通り、みんな可愛い！ 値切つて良かつた…！」

「俺の所にはスカート見せに来ないのは何故？」

ウルフの寂しそうな問い掛けにハツキが答える。

「だってアンタ、購入に何も寄与してないでしょ！ リュカさんが買つてくれたんだから！」

「出だしは俺の魔道士の杖からだろ！」

「まあまあ…そんなに拗ねるなよウルフ。後で一緒に『ベリーダンス』見に行こうよ！」

「…リュカさん、ベリーダンスって何ですか？」

「うん！ アッサラームの劇場でね、毎晩裸同然のねーちゃんが踊るんだつて！ さっき町の人聞いたんだ！ だからさつさと夕飯済ませ

て、町に繰り出さないと！」

「何や！ダンスならウチがリュカはんの上で、幾らでも踊るねんで！」

「うん。それはまた今度楽しませてもらひよ」

本当にわざと夕飯を済ませたリュカは、ウルフを伴い町へと繰り出す。

アルルとHコナは夜間営業の武器屋に行く為、男一人のお田付役はハツキになつた。

「あー…楽しみだな～！どんなダンスなんだろう？ブルンブルン揺れちゃうかな！？」

「もう！リュカさんエッチすぎです！ウルフもそういうのが好きなの？エロガキね！」

ウルフは何も言えず黙り込む…

幼い頃から面倒を見ててくれたハツキには、やはり逆らえないのだ。

「あ～ら、素敵なお兄さん！ねえ、パフパフしましょ。いいでしょ？」

リュカ達は不意に女性に声をかけられた。

「…パフパフ～？」

怪訝そうなリュカ。

「…パフパフって何ですか？」

本氣で知らない純情ウルフ。

「きっと如何わしい事よ。相手しちゃダメ！」

決めつけるハツキ。

リュカは女性の胸を注視して呟く。

「それで出来んの？足りなくね？」

「な～！失礼ね！」

「あの、パフパフって何ですか？」

「あら、坊やは興味あるの？お姉さんが優しく教えてあげるから、

私の部屋に来ない？」

女性はウルフを妖しく誘う…

「よしウルフ！何事も経験だ！行つてこいよー僕はベリーダンスを堪能してくるから！」

そう言つとリュカはその場を立ち去つてしまつた…もちろんハツキも一緒に…

そして残されたウルフは、女性に手を引かれ彼女の部屋まで付いて行く事に…

大人の階段を登りきる事が出来るだらうか！？

ウルフに幸せは訪れるのだろうか！？

## &lt;アッサラーム&gt;

まだ日も昇りきらない早朝、ささやかな事件が発覚した。

昨晩の体験を追い払うが如く、一人で魔法の特訓をしていたウルフが、特訓を終わらせ割り当てられた自室に戻ると宿屋の廊下を歩いていると、リュカの部屋から1人の女性が気配を消しながら出てきた。

「あれハツキ？ 何やつてんの？ そこ…リュカさんの部屋だろ…え！？ ま、まさか…うぐつ！」

リュカの部屋からこつそり出てきたのを、ウルフに目撃されたハツキは、慌ててウルフの口を手で覆い喋れない様に羽交い締めにする。そしてそのまま宿屋を出て、人気のない物陰へと連れ込む！

「…つぶはー…ハ、ハツキ…お前もしかしてリュカさんと…」

ハツキの怪力から逃れたウルフが、ハツキに問いかける…

「そ、そうよ…だつて…リュカさん…格好いいんだも…」

俯きモジモジするハツキの顔は、薄暗くてもハツキリ分かるくらい真っ赤だ。

「あ、あのね…みんなには…黙つててほしいの…」

「何で？」

「だつて…その…恥ずかしいし…」

「俺は構わないけど…すぐにバレると思うけどね…」

「い、いいの！ それより、アンタこそ昨日はどうだったのよー」

ともかく話題を変えたくて、ウルフの昨晩の事を聞き出そうとするハツキ。

「…頼む…聞かないでくれ…お願ひだ…」

どうやらトラウマになる様な事があつたらしく、ウルフは半泣きで頼み込む… いつたい何が？

＜砂漠＞

アルル達一行は灼熱の砂漠を突き進む。

サンサンと輝く太陽の光を遮る物は何もない。

ただ、いつの間に買ったのか、リュカが青く大きなパラソルを差し日陰を作り出している以外は…

しかしパラソルで作られた日陰に居ても、体力の消耗は著しく、リュカに合わせて歩くだけで精一杯の様だ！……リュカ以外！リュカは異様にテンションが高く、パラソルを上下に揺らして歌つている。

歌うは『東京音頭』……ツバメ好きか？

だが誰も文句を言わない…この暑さで文句を言う氣力も無くなっているのだ。

小さなオアシスを見つけた一行は、側に生えてある木を利用して簡易テントを作り、休める場所を確保する。

「ちょっと早いけど、今日はここで一晩明かすか…」

木陰でへたばるアルル達の為に、野営の準備を黙々とこなすリュカ。簡易食を手早く作り、皆を起こして食事をさせる。

「リュカさん…ありがとう…でもリュカさんは元気ですね」

「ほんま…何でそんなに元気なの？」

「僕は寒いの苦手なんだけど、暑いのは平気なんだ…女性が薄着になるしね！それに以前、砂漠より暑いダンジョンを探検した事があるんだ！あそこは凄かったよ！」

昔を語り調子に乗ってきたリュカは、元の世界での冒険談を話し始める。

殺された父の遺志で、伝説の勇者を捜す冒険談を…

攫われた母を助ける為、伝説の勇者を探す…その為に天空の武具を見つけ手に入れる事…そして天空の盾を手に入れる為に挑んだダンジョンの事…

「ほなリュカはんは、盾を手に入れる為にフローラつちゅう娘と結婚したんか？」

「ううん。フローラとは結婚してないよ。滝の洞窟へ向かう前に再会した、ビアンカって言つ幼馴染みと結婚したんだ！」

「でもフローラさんと結婚しないと、天空の盾が手に入らないんですね！？それじゃお父様の遺志を果たせないじゃないですか！？」アルルも父の遺志を繼いで、バラモス討伐に旅立つた為、思わず過敏に反応する。

「うん。そうだね…でもね、ビアンカが言つたんだ『リュカは沢山不幸な目に遭つてきただから、もう幸せになるべきだ』って…確かにフローラと結婚すれば幸せになつたかもしれない…莫大な財産、巨大な権力、美しい妻…そして父の遺言の天空の盾」

「じゃ何で結婚しなかつたんだよ！」

「簡単だよウルフ…僕を最も幸せに出来るのはビアンカだけだからね！」

皆がリュカの話を噛みしめている…納得できる部分も出来ない部分も…

「じゃあ…結局、伝説の勇者様は見つからなかつたのですか？」

そんなハツキの質問を受け、リュカが笑い出した。

「あはははは！それがさ、笑っちゃうんだけどね…もし僕が真面目に勇者様探しを続けていたら、永遠に見つける事は出来なかつたんだよ！」

皆、不思議そうな顔でリュカを見続ける。

「僕が自己の欲望に負けてビアンカを選んだからこそ、勇者様と出会えたんだ！」

「ど、どうじうことや？」

「なんと…伝説の勇者様は………僕の息子なのさ！あはははは、ち

よ～うける～！勇者を見つける為に… 天空の盾を手に入れる為に、  
フローラと結婚してたら、伝説の勇者は誕生しなかったんだ！『伝  
説の勇者なんかどうでもいい！ビアンカと結婚できれば、世界なん  
てどうでもいい！』って結論に達したから勇者に出会えるなんて…  
何なのこの嫌がらせ？だから僕は神なんて信じないんだ！』  
リュカという男の人となりに、皆がそれぞれ驚いている。  
特にエコナにとつては…

金儲けを夢見ているエコナ… 何れは大きな権力を手中に入れたいと  
思つてはいるエコナには…

『ウチには考えられへん！金と権力を手に入れた後に、愛人にすれ  
ばええやん！それで全てが手に入るやん！』

「なあリュカはん… こんな事言つたら怒るかもしねへんけど… 金  
と権力を手にした後で愛人にすれば良かつたんとちやう？奥さんも  
リュカはんの事好きなんやし、問題無かつたと思うんやけど？」  
人は誰しも、自分の思考の範囲内でしか物事を計る事は出来ない。  
エコナもまた人である。

「う～ん… 出来なくは無かつたと思つけど…」

「なんや、煮え切らんな！」

「… 心は… どうなつてただろうね？」

「「「「心？」」」

アルル達が一斉にハモる。

「僕はビアンカの心も愛してるんだ。でもビアンカを選ばなかつた  
ら、彼女の心はどうなつてただろう？その後で『一番愛してるのは  
ビアンカだ』と言つても、愛より金や権力を選んだ僕の事を、心か  
ら愛してくれるだろうか？」

リュカは怒るどころか、優しく問い合わせてきた。

「… そ、そつは言つても、全てを手に入れるなんてムリやん！金、  
権力、美女… それに伝説の勇者！ こんだけ手に入れば十分やん！」  
「全然十分じやないよ… 美女の… ビアンカの心が手に入らなければ

…

エコナの瞳を見つめ、悲しそうに語るリュカ…

「逆に言えば、ビアンカと彼女の心が手に入れば、その方が十分満足なんだ！他の物は…まあ、何とかなるでしょ！？」

そんな満面の笑みで妻の事を語るリュカ…そして話は、憤氣話へと発展していく。

ウルフにはともかく、少女3人には苦痛となる時間だった！

ハツキの後日談だが…

『エッチの時の話まで、する必要は無いと思います！』

……あの男、何考えてるんだ！？

砂漠（後書き）

いつたいウルフはどの様な体験をしたんでしょうかねえ？  
きっと素敵な青春の1ページになつたのでしょうかねえ！

## 砂漠の王国、砂漠の女王

＜イシス＞

イシス…其処は大きなオアシスの側に造られた砂漠の町。町の奥には大きな城がそびえ立つていて。

アルル達が到着したのは夕刻だった。

リュカ以外、疲れ果ててはいたが宿を確保すると、町へ出て様子を伺う事に…

「魔法の鍵の事を知つている人が居れば良いけど…」

そんなアルルの不安はすぐに解消される事となる。

曰く、「魔法の鍵？ああ！それなら此処より北の『ピラミッド』に保管されてるらしいよ」

曰く、「『ピラミッド』に入るのなら、女王様の許可が必要ね！勝手に入つたら、墓荒らしとして拘りますよ」

曰く、「『ピラミッド』には、様々なトラップが仕掛けられている！頼まれたつて入りたくないね！」

曰く、「女王様の美しさには、モンスターをもひれ伏すであろう！」

大まかに情報を仕入れたアルル達は、宿屋へ戻り作戦会議を行う事に。

此処は宿屋のアルルの部屋。

リュカ以外が集まり明日の予定を話し合つ。

「これで、目的地が定まつたわね！」

「そうですね。では、明日朝一で女王様へ謁見を致しましょう。許可を戴かないとピラミッドへは入れませんから」

「な、なあ…リュカさんは置いていった方が良くないか?」

ウルフが小声で話す。

「そやで!町でも美しいって評判の女王やでー下手したら、下手するやん!」

皆、見つめ合い頷く。

美女で女王…最悪の組み合わせだ。

どう転んでも碌な事にはならないだろつ…

(コンコン)

「みんな~明日の予定は決まつた?」

其処へ現れるリュカ。

実に良いタイミングである。

「あ!実はリュカさん、あ「僕、明日は町を探索してるよ」リュカに留守番を頼もうとしたが、リュカの方から残留を表明してきた。

「え!…そう…リュカさん…残るのね…」

「うん。だから4人で謁見してきてよ」

アルル達にとつては願つてもない事だ。

そして宿屋から出て行くリュカ…

いつたい何処へ行くのやら…

翌朝、リュカとの鍛錬を終えたアルル達は、女王へ謁見する為に城へと赴く。

城へ着き、係の衛兵に用件を伝えると、

「只今、女王様は別件にて政務中である!暫し此処で待つ様、仰せつかつた」

と、待ち惚けを喰らう事に……しかもかなりの時間。

一方リュカは砂漠の美人を求めて、町中を彷徨つてゐる。

『砂漠の国の女王様…きっとアイシスみたいな女だろう…だいたい  
イシスとアイシスって似てるんだよね！いくら美人でも、近付きた  
く無い女だ！町でナンパしてる方が100倍マシだ！』

「ねえねえお嬢さん！僕とエッチしない！？」

「何だ二元!? 僕の女房に何の様だ!」

「おお二どごめんなさうし！ 素敵な旦那が居るとは知らなかつたので、じゃあね～」

そんな感じで表通りから裏通りへと…

そんな時！

「きやーーー！誰かタスケテーー！変な男に攫われるうーーー！」

新たな出会いを求めてリュカがダッシュで赴くと…

其処には、紛う方なき美少女が3人の男に腕を引っ張られ、攫われそうになつてゐる現場だつた！

いきなり現れ意味の分からぬ事を叫ぶ男に、戸惑つた男達…

男達が戸惑つた隙に、襲われてた少女はリュカの方に逃げ寄り抱き付いた。

「どなたかは存じませぬが、助けて下さいましーあのぶ男達が『へ  
つへつへつ、ねーちゃんあつちの物陰で良い事してやんぜ!』って  
言つて、いやらしい手で私を触るんですよー

「な、何勝手な事を「うるさい！痛い目に遭いたくなければ、今すぐ失せろ！僕は暴力事が嫌いなんだ！」  
女性を庇う様に立ちはざかるリコ。」

「ちい！仕方ない…大事にするわけいかないな…おい！手早く始末するぞ！」

3人の男のリーダー格が、他2人に指示を出し、リュカに襲いかかる！

「ちょ、女の子1人に大袈裟じやない？何、殺氣立つてんだよオマエら！もしかして地雷踏んじゃつたのかな、僕…」

3人の攻撃を余裕で躱しつつ少女を守るリュカ。

自身の技量には多少の自信があつた男達は、全く掠りもしない現状に焦りだした！

「メラミ」

そして焦つた男の1人が思わず魔法を唱える！

「バギ」

しかしリュカのバギで四散され実力の差を思い知る事に…さらにリュカは素早く3人の懷に飛び込み、強烈な一撃を食らわせる！

メラミを放つてから、一瞬の出来事だった…

「凄い…あの3人を一瞬で…」

少女が驚き呟く。

3人を気絶させたりュカは、少女の元へ近付くと、「やあ…改めましてここにちは。僕の名前はリュカです。エッチする事を前提に、一緒にお茶でもどうですか？」

こんな状況でふざけたナンパをするリュカに、更に驚く少女…しかし直ぐにそれが笑いに変わる！

今までこんな男に出会った事がない…

不思議そうな顔で微笑むリュカを見つめ少女が…

「よろしくねリュカ。私はレイチエル。何処かお茶の美味しいお店、知ってるの？」

こうして2人はその場を離れて行く…  
気絶する男3人を置き去りにして…

一方アルル達は、半日待たされ続けたのにも拘わらず、『申し訳ありませんが、本日の謁見は出来ません。また後日お越し下さい』と追い返された。

入城した時は、朝日が眩しかったのに、今では夕日が輝いている…

「あ…何にもしてないのに疲れたわ…」

「本当だな…」

「でもリュカはんを置いてきて正解やつたね…」

「ええ！侍女の方々も美人揃いでしたもんね…」

「一緒だったら、もっと疲れてたよ…きっと…」

みんな溜息と共に宿屋へと戻つて行く…

リュカに今日一日は無駄であった事を伝え、明日の予定を伝えねばならない。

今日と同じではあるのだが…

金田一（金田一）

今日は出だしからです！

あの野郎…

初っぱなからやられました！

＜イシス＞

「な…何やつてんだよ…」

アルル達は宿屋へ戻り、状況説明をする為リュカの部屋に訪れた。ドアを開け入室すると、中ではリュカと見知らぬ少女（レイチエル）が閨事の真つ最中であった！

「全く…こつちは大変だつたんだぞ！一日待ち惚けで…」

「あはははは。そんなに怒るなよ。……で、女王様には会えたのかな？」

数分後、ともかく行為を止めさせ、一人が服を着るのを待つてから状況の報告に入る。

「会えなかつたわ！忙しいんだつて！リュカさんと同じで…」

トゲのある発言をするアルル。

「へー、大変だつたね」

しかし全く堪えてない。

「貴女達は女王に会つて何をしたいの？」

不意にレイチエルが会話に割り込んできた。

「何や…？急に会話に割り込んで！だいたいアンタ何なんや…？」

「ああ、ごめんね。私レイチエル！今日危ない所をリュカに助けられたの！そんで、今さつきお礼をしていたところよ」

「何でリュカさんはそつやつてトラブルに遭遇するの…凄い命中率よね！」

「何でだろ？面倒事嫌いなんだけどね？」

笑っているリュカに呆れるアルル。

「で、何で女王に会いたいのよ…」

「私達、バラモス討伐の旅に出てるんです。その為にピラミッド

にあると言われる、魔法の鍵を入手したいんですけど……」

「なるほど…ピラミッドへ入る許可を、女王に貰いに行つたのね…

勝手に入っちゃえれば良かったのに…」

「アホか！そんな事したら墓荒らしとして、手配されてまうやん！

ウチらは魔法の鍵が欲しいだけや！墓、荒らしたい訳どしちゃう！」

エコナはジェラシーから、レイチエルにきつく言い放つ。

「私、城には顔が利くんです！何だつたら今から謁見できる様、計らいましょうか？」

「ほ、本当ですか！？しかも今からでも良いんですか？」

「ええ！リュカがどうしてもつて言うなら、私頑張っちゃうなあ～」

そう言い、リュカの首に腕を回し甘えるレイチエル。

それを見て、一気に苛つくアルル・ハツキ・エコナ！

そんな女性陣に怯えるウルフ。

「じゃあレイチエル…お願いするよ」

リュカは気にもせず、レイチエルにキスをする…

砂漠に血の雨が降るのは、時間の問題だらうか…？

リュカと腕を組み、イチャイチャしながら城内を歩くレイチエル。  
そんなレイチエルを見て、唖然とする人々…皆、言葉を失っている  
様だ。

そんな状況を感じ取る余裕のない少女3人。

そんな少女3人のイラつきに、怯える少年が1人。

この奇妙な男女6人は、誰にも止められることなく、イシス城謁見  
の間へと入室して行く。

謁見の間に入ると、既に幾人かの側近等が待ち構えており、皆驚いた様子でリュカ達を見ている。

その中にはリュカが昼間に気絶させた3人の男も含まれている。

「ただいま！久しぶりの城下は凄く楽しかったわ！」

レイチエルはリュカの腕から離れると、軽い口調で今日の感想を語り、玉座へと腰を下ろした。

「女王様！お戯れが過ぎますぞ！」

側近の一人…多分、最も位の高い大臣がレイチエルに向けて苦言を呈す。

「偶にはいいじゃない！」

それを軽い口調で流すレイチエル。

「ちょ…じょ、女王様！？貴方、イシスの女王だったの！？」

「口を慎まんか！」

アルルの発言に激怒する側近達…

「黙れりなさい！この者達は良いのです！私は身分を秘匿して、この者達と接していたのです…」

「し、しかし！」

レイチエルが許しを出しても、不満を口にする側近…恰好からして軍人であろう。

「女王がいいつて言つてんだから、黙れよハゲ！」

「な、何だとお！」「この無礼者め！」

爽やかな笑顔で無礼な物言いのリュカに、ブチ切れる軍人…腰から剣を抜き放ち、リュカに襲いかかってくる！

「ブレイザー、お止めなさい！」

ブレイザーと呼ばれた軍事は、リュカまであと3メートルの所で止まる。

そして苦々しい表情のまま、剣を鞘に戻し下がつた。

「ごめんなさい、皆さん。ちょっと気が短いのよ、彼…」

今にも血管がキレそうな程、顔を赤くしているブレイザー…「茹で蛸みたいだね」

リュカとレイチエルが揃つて笑い転げる！

アルル達は傳き、胃痛に悩まされている！

「さて…十分笑ったところで、本題に入りましょうか…確か、ピラミッド探索の許可が欲しいんですね！？」

「はい。バラモス討伐の為には、ピラミッドに保管されている、魔法の鍵が必要です。どうか我々に許可を…」

恭しく嘆願するアルル。

「…条件が一つあります！」

宿屋での気さくさが微塵もなくなつたアルルを見て、意地悪をしたくなつたレイチャエルは、素直に許可を出さない。

「条件とは何でございましょう？」

「ふふ…簡単よ…リュカが私と結婚する事よ！」

一人傳いてないリュカを見つめ、国家の行く末が左右されそうな条件を提示するレイチャエル！

「な！…そんな横暴な！」

「せや！…そんなん認めへん！」

急に立ち上がり、レイチャエルに向けて苦情をぶつけるハツキとエロナ。

「ハツキ、エロナ、黙つて…！」

「「うつ！」」

アルルに怒鳴られ、再度傳ぐ二人。

「女王様…その条件は、私の一存では答えられません…当人の意志を尊重致します」

「…なるほど…では、リュカ。私と結婚して下さいますか？」

先程までは冗談半分な表情だったが、今は真面目な表情で求婚するレイチャエル…本気でリュカの答えを待つている。

「えー？ヤダよ！」

この場にいた誰もが驚く発言をするリュカ…

「き、貴様ー！…女王様の気持ちを踏みにじるとは…「うつさい！」

黙れよ！お前には関係ないだろうが、ハゲ！」

また一人激怒するブレイザー！（国家の重鎮だし関係なくは無いんだけどね）

頭皮の事をかなり気にしているらしく、先程よりも勢いを増してリュカに襲いかかる！

レイチエルも求婚を断られたショックで、少し呆然としていた為、今回は止める事が出来なかつた！

レイザーはリュカに向けて剣を振り下ろす！

しかしリュカは、表情一つ変えることなく、右手の親指と人差し指で摘み受け止めた！

「オイオイ…女王の前で流血沙汰は拙いんではない？」

「ブ、レイザー！退きなさい…私の客ですよ！」

しかし退かないレイザー…いや、退けないのだ…全体重をかけて剣を引き戻そうとしているが、リュカの手から剣が離れない！

「リュ、リュカさん！手を放してあげて下さい！」

気が付いたアルルがリュカに告げる。

「あ！ そうか…」

リュカは慌てて手（指）を放す…すると、レイザーが勢い良く後方へ吹っ飛んだ！

何やら何処かで見た様な光景だ…

凄まじい勢いで壁に叩き付けられたレイザーは、そのまま気を失い壁際に崩れ落ちた。

「…やつと静かになつたね」

リュカの一言に、騒ぎ出しそうになつた側近達を手で制し、穏やかにリュカへと語りかけるレイチエル。

「リュカ…何故、私と結婚してはくれないのでですか？私と結婚すれば、イシスの王になれるのですよ？」

「ヤダよ！王様になつたら自由に冒険出来ないじゃん！」

「……では、ピラミッドへの探索許可は認めません…困るのでないかしら？魔法の鍵が手に入らないと」

レイチエルは少し意固地になつていた。

「僕は困らないよ。ただ、バラモスを倒せなくなるだけだし…」

そう…バラモスが倒されないと困るのは、この世界の人々だ…

イシスの女王とて例外ではない。

「…………」

「…………」

リュカとレイチエルは見つめ合いながら沈黙を続ける。

「ふふふ…分かりました。諦めます！あ～あ…私、本氣でリュカの事好きになっちゃつたのに…」

「ごめんね。初めから敵わぬ恋だつたんだよ…僕、奥さん居るし…」

「え、！？奥さんが居るのに私の事ナンパしたの？」

謁見の間に側近達のざわめきが広がる！

それに比例して、アルル達の胃の穴も広がる様だ！

アルル達が胃潰瘍で倒れる前に、ピラミッド探索の許可を貰えるのだろうか？

命中率（後書き）

女王に手を出しどいて、無事に城から出れるんですかね？  
リュカさんの未来が心配です。

＜イシス＞

「え、！？奥さんが居るのに私の事ナンパしたの？」

謁見の間に側近達のざわめきが広がる！

「うーん…まあ…ね！美人に逢つたら口説けつて家訓だから！」

「き、貴様！女王様に変な事はしないだろうな！？」

一番偉そうな大臣がリュカの胸ぐらを掴み問いつめる。

「変な事などしていない！普通にエッチしただけだ！3発程…」

真面目な顔で言い放つ！

「なあ…………！」

大臣は大きく口を開けて絶句する。

「やつぱりリュカには責任を取つてもらいたいわ！そうでしょ…」

「結婚は出来ん！愛人で良ければOKだけど…ただ、女王を辞める事！必須条件ね」

どう考へても条件を提示できる立場ではないのに、何故か偉そうな男だ。

「うーん…今、私が辞任したらイシスが混迷するのよねえ…でもリュカの愛人にはないたいなあ…」

「…………じょ、女王様！！」「…………」

家臣の皆さんが泣きそうな声で叫ぶ！

「冗談よ！残念ではあるけど、女王を辞めるわけにはいかないわ！」「で、ピラミッド探索許可是貰えるのだろうか？」

リュカは悪びれもせず、何時もと変わらぬ口調で許可をせがむ。

間違いなくイシスのお偉いさん方を敵に回しただろう！

「ええ！勇者アルルとその一向に、ピラミッド探索許可を『えます。ピラミッド内で入手したアイテムは、自由に使って下さい。バラモ

ス討伐に役立てば幸いです』

「ありがとう」

「ピラミッドへ

「何やー!? アイテムは自由に使って良い言づといて、ダンジョン内の宝箱はカラayan! あの女、何もない分かつて言つたんぢやうか?」

エコナはピラミッド内で見つけた宝箱を無造作に開け、不機嫌な声で愚痴をまき散らす!

「そりやそりやー! 王家の墓つて言つたら、財宝が沢山ある物だと誰もが思つてるよーこんな入口付近に残つてるわけないって!」

「ほな『アイテムは自由に使つてえー』とか言つなやー! 期待してまうやん! !」

ウルフの冷静なツッコミ、一層立腹のエコナ…

「そんな事を俺に怒るなよーそれに、奥の方の超危険な場所の宝は、残つてるかもしれないだろー! 女王様はその事を言つたのかもしねないだろー! 入口付近如きで結論出すなよーあと俺にハツ当たるなよー! まだまだ女の扱いが雑である…」

エコナとウルフが口論をしていると、珍しく大人しくしていたリュカがポツリと囁く様に喋る出す。

「宝箱を不用意に開けない方がいいよ…王家の墓つて言つたら、トラップが満載だらうから…危険だよ。それに僕達の目的は『魔法の鍵』だろー墓荒らしみたいな事するの止めようよ。お亡くなりになつた方に失礼だよ…」

「何言うてんねんリュカはん! ? 女王自ら許可したんやー墓荒らしひはならんて! 平和の為に使う事こそが、女王の願いやーその思い、しかと汲んでやうやないの! !」

「勝手だなー」

そしてリュカは、また大人しくなつた…

普段なら、陰気なダンジョン内では歌い出すはずなのに、終始付近を警戒し歩いている…

モンスターの出現率も上がらず、本来はこれで当たり前なのに、何故だか不安が増すアルル。

「あの…どうかしたんですカリュカさん？何か心配事でも……？」

「ん？ああ…ちょっと…」

「何や、今更王位が惜しくなったん？」

「ううん、そんなんじゃないよ…ただ、僕…アンデット系、嫌いなんだよね！」

「はあ！？アンデット系が嫌い？」

怪訝な表情で聞き返すウルフ。

「此処…お墓でしょ！出でくるモンスターってアンデット系でしょう…ぼく、アンデット系には近付きたくないから、危なくなつても助けないからね。危なくなつないでね！」

「何だよ！そんなの何時もの事じやん！何時も戦闘には参加しないじゃん！アンデットとか関係ないじやん！」

「…………まあ、そう言う事だから…妙な仕掛けに引っかかる様に注意して進もうよ」

「またカラや！」

リュカが注意する様に言つたにも拘わらず、宝箱を開けまくるHUNNA。

ピラミッドを奥へ進みつつ、田に付く宝箱は全て開ける。

「おー？あつちには3つも宝箱があるやん！今度こそ何か入つてるかも！」

一人小走りで3つの宝箱に近付くエコナ…

「まったく…あれが商人魂…のかしら…」

アルルは勝手な行動をするエコナに呆れながら、はぐれ様に彼女の元へ近付く。

同じくエコナの元へ進むリュカは、周囲の異様さに気付き警戒し始めた…

「エコナ…気を付ける！何かヤバイぞそれ！」

「何が？…またカラヤで！？」

リュカの忠告を気にせず、さつさと宝箱を開け始めたエコナ…しかし、2つ目の宝箱に手をかけた瞬間、宝箱が自ら動きエコナに襲いかかってきた！

「キヤー！！！」

それは鋭い牙を携えた『人食い箱』である！

人食い箱の牙が宝箱を開けようとしたエコナに襲いかかる！

（ガシュ！！）

肉を裂く鈍い音が響き、エコナの顔に真っ赤な血しぶきが飛ぶ！しかし、その血はエコナの物ではない！

いち早く異変に気付いたリュカの血だ！

リュカはエコナに噛み付こうとした、人食い箱と無防備だったエコナの間に左腕を入れ、エコナの変わりに人食い箱の攻撃を受けている。

「痛いだろ！コノヤロー！！」

リュカは人食い箱ごと腕を壁に叩きつけ、噛み付いた人食い箱を叩き壊す！

「怪我は無いエコナ？」

人食い箱がコナゴナになつたのを確認すると、へたりこむエコナに近寄り優しく問いかける。

「ウ、ウチは…へ、平気や……それよりリュカはんの方が怪我してるやん！」

リュカの左腕から滴る血を見て、血相を変えるエコナ。

アルル達も、泣き出しそうな表情でリュカに近付く！

「そんなに心配しないでも大丈夫だから。……ベホイミ……ほら

傷口の塞がつた左腕を見せるリュカ。

そんなりュ力に抱き付き、泣きながら謝るエコナ。

「ごめんなさい！リュ力はんが注意してくれたんに…ウチ…ウチ…」

「うん。これに懲りたのなら、宝箱を開ける時は注意して開けようね。一人で先走らない事！」

エコナの頭を優しく撫で、隊列を乱さぬ様注意を促す。

「でも何で危険だつて分かつたの？」

ウルフがリュ力に疑問をぶつける。

「うん。見てごらん…此処の宝箱の周りには、人骨が沢山落ちてるだろ。他の宝箱の周りには無かつたのに…だから、此処で死ぬ人が多かつたんだと思ってね…案の定、こんな事になつたけどね」

「さすがリュ力さん！凄いです！格好いいです！」

ハツキがリュ力に抱き付き、褒め称てる！

「そう言う状況の変化を、見逃さない事が重要なんだね！」

ウルフも瞳を輝かせ、リュ力を師と仰ぐ！

「そうだぞウルフ！常日頃から変化に気付ける様にするんだ！」

「はい！」

「特に女の子は直ぐ髪型とかを変えるからね…変化に素早く気付き、褒めちがるんだ！そう言つ細かい事に気付く男はもてる！」

「はい！！」

最早、旅の仲間というより、師匠と弟子の関係になりつつある。ウルフの未来はある意味明るい！

## ト ラ ッ プ

「ピラミッド」

アルル達はト ラ ッ プに気を配りながら、ピラミッドを更に奥へ進んで行く。

火炎ムカデやミイラ男・マミーと言つたモンスターの攻撃を打ち破り、奥へ奥へと突き進む。

言つまでもない事だが、リュカは宣言通り何もしない。何時もと同じ…

エコナも人食い箱を警戒して、宝箱を見つけてもいきなり開けなくなつた。

まあ…人食い箱だった場合を想定して、身構えながら宝箱を開けるのだが…

暫く進むと、大きな石の扉が一行の前に立ちはだかる。

「なんやここ？隨分と厳重やね！」

「これだけ厳重にしてるつて事は…」

「ええ…多分この奥に魔法の鍵があるのよ！」

少女3人は重厚な石の扉を調べながら言葉を交わす。

「これ、どうやって開けんねん！」

「何処かにスイッチみたいのがあるんじやない！？」

「そうですね、とても人力じや開きませんよね！」

少女3人が扉を調べるのを止め振り返ると、居るはずのリュカとウルフが居なくなつてているではないか！

「え！？ ちょ…リュカさん！」

リュカが居なくなつた事に不安を感じたアルルが、涙声で叫ぶ。

「な、に、？」

奥の方からリュカの声が聞こえる…

「どうしたの？」

リュカの声とは別方向からウルフが現れる。

「ちょっと…勝手にフラフラしないでよ…」

「せや…不安になるやん…」

責められるウルフ…

「だ、だつてリュカさんが『何処かにボタンがあるから探そつぜー』って言うんだもん！」

「…………で、あつたの？」

「う、うん…向こうに2つあつた…」

「あつちにも2つあるよ」

戻ってきたリュカが申告する。

「つまりボタンが4つあるのね…」

「どのボタンが正解やろ？」

「流石は王家の墓…一筋縄ではいかない様だ。

「リュカさんはどれだと思います？」

困ったアルルは、事態の解決をリュカに押し付ける様に訪ねる。

「さあ…どれだろうねえ…でも僕が思うに、どれか1つが正解ではなく、4つのボタンの押す順番が重要だと思つよ」

「何でそう思うんですか？」

「だつてさ、1つのボタンが正解だつたら、偶然に正解する人も居ると思うんだよね！でも今まで正解した人は居なさそうだし…」

「じゃあ…その順番は？」

「おいおい…幾ら何でもそんなの知らないよ…」

アルルは困るとリュカに頼る様になつてゐる…あまり良い事では無いです。

「闇雲に試すのは危険だし、一旦イススへ帰ろつよ。レイチエルなら何か知っているかもしねないし…」

「此処まで来て町へ戻んのはシヤクやな！取り敢えずボタン押して

みようやないか？偶然正解するかもしねへんやん！」

「え～…危険だよ～」

「私もエコナの意見に賛成よ！」

パーテイーリーダーのアルルがエコナの意見を推奨する。

「此処まで来たんだもの…何もしないで帰れないわ！」

「じゃあ…どのボタンを押します？」

少女3人はレイチエルに会いたく無いらしく、町へ戻る事を拒否している。

「ほな、端から押して行くで！」

エコナがボタンを押そうとし、アルル達が敵の出現に警戒をする。  
(リュカ以外)

(ポチ)

すると突然床が抜け、一行は一人の例外もなく落下して行く！

「「「きやー！！！！！」」

(ドサー！)

「いてててて……何だ？此処！？」

たいした高さでは無かつたが、不意を突かれた為受け身をとる事が出来ず、予想外に痛い思いをしたリュカ…

「みんな…無事？」

ひとまず少年少女を気遣い手を差し伸べる。

「…いたたた…リュ、リュカさん…どうしよう…あ、足の骨が折れちゃった…」

なんと、落下の衝撃でアルルが足を骨折してしまった！

「だ、大丈夫ですかアルル！今すぐホイミを「ダメだ！」

「「え！？」」

ハツキがアルルに近付きホイミを唱えようとしたが、リュカに阻まれてしまつ。

「変な状態でホイミをかけると、そのままの状態で骨がくつついて

「そいつは骨を真っ直ぐな状態にしないと……アルル、もの  
つそい痛いよ！我慢出来る？」

リュカは涙目のアルルの瞳を覗

お、お願ひします……

リュカは自分のハンカチを取り出し、アルルに噛ませ骨折箇所に手を当てる…

そして

（二）

アルルがぐぐもつた叫び声を上げ

「ベイビー」

リーガはベホイミで骨折を治療する……………か、魔法が発動しない……………

なに！　へホイミ！　へホイミ！

が、何處か発動せんの

「おうやく！」

ウレフが通路の奥の方間がナ、メフを畠えてみる が、やおつ魔法

が発動しない！

きっと、フロア全体に『マホーン』の魔法がかかつてゐる

「うん。じゃあ、取り敢えず此処から脱出！その後は一旦町へ戻る

いいね！？

エニナモバツキモ黙ニテ顙ぐ

……つと、その前にアルルの骨を固定したいな。ウルフ、何が添え

木になる様な物無い?」

リガに訪ねられたウルフは、周囲を見回し大量に散乱している骨

を一本拾い手渡す。

「ちょっと気持ち悪いけど、これで我慢して貰うしか…」

「ありがとう。しょうがないよ…………でも……このフロア、骨だらけだな……何があるんだ、此処には?」

気絶したアルルの足を拾った骨で縛り固定する。

戦闘になつた場合、参加出来ないウルフにアルルを担がせ、一行は通路を向かつて右へと進んでみる……どちらが出口か分からぬ為、勘を頼りに進み行く。

『あ……やだなあ……敵、出てこないといいなあ……特にアレ……腐った系!アレ攻撃すると、杖が臭くなるんだよなあ……そうだ、アルルの『鋼の剣』を借りよう!…………ああ……戦うのやだなあ……』

女の意地が招いてしまつたこの状態…………ある意味リュカのせいなのでは……?

ペラリニアード

珍しくリュカを先頭に隊列を組む一行。モンスターに発見されぬ様、物音を立てない様に歩く……しかし、足下には大量の白骨体が散乱し、実質音をさせずに歩く事は出来ない。

「しぐじつたな……」

不意のリュカの咳きがみんなを不安にさせる。

「ど、どうしたんですか？ 何をしぐじつたんですか！？」

アルルを担ぎリュカの直ぐ後ろを歩くウルフが、震える声で訪ねた。「足下を見る……白骨体が増えている」

「そ、それが……？」

「つまり……こっちで死ぬ人が多いって事だよ……」

「じゃ、じゃあ……今からでも引き返しませんか？」

「何言うねん！ 出口に近付いてるから、トラップが発動してるので知れへんやろ！」

「そうだね……ウロチヨロしても危険だ……取り敢えずは進んでみるしかないね」

そしてリュカは進み出す。

トラップが何時発動しても対応できる様に、慎重に……ゆっくりと……

一行は行き止まりの部屋で立ち尽くしてくる。其処には大きな石棺しかない。

「ちいっーーー！ ちじゅなかつたか！」

リュカが踵を返し、元来た道を戻り立つとすると、ヒコナが声をあげ皆を止める。

「なあ！あの石棺…怪しくないか！？もしかして出口に繋がる通路になってるかも！」

「何言つてんだよー俺達は地下に落ちたんだぞー更に地下へ潜つて  
どすんだよー！」

「アホか！上へ向かうだけが、地上への道とは違うへん！ 一田地下へ潜る事も必要かもしけへんやん…」

そう言うとエコナは慎重にだが石棺へと近付き、石蓋に手をかける。しかしエコナ一人の力では動かない……見かねたハツキも一緒に押し始める。

リュカも『通路は無い』と言い切れず、ただ黙つて見てゐしか出来なかつた。

石蓋を押し開け中を見ると、其処には2体のミイラがあるだけで通路等は存在しない。

「たたの石楠だ……引き返そ！」

待つて下さい! 何が変じたのですか?」の三ヶ月後、「トラップの発動しそうな宝箱や棺などには、なるべく触りたくない触つてほしくない力は、『五棺』の切つ掛が確忍でき

なかつたので、サツサと来た道を戻ろうとしたが、エコナが石棺の中の違和感を感じた為、皆を呼び止めて2本のミイラを調べ始める。

早く出口蔵をひつて、一、二

「見て下さい、このミイラ… 1体はキレイに埋葬されているのに、もう1体は雑に放り込んだ様に見えます！」

「ほんまやねえ……普通、棺に入ってる遺体って仰向けてキレイに整つておなじみで、おまけに二つ三つ差しあるミイラは横向ぎちんがちん

背中を丸めてる…………ん!? 何か抱き抱えてるで!」

エエナは雑に埋葬されてるミイラの腕を、無理矢理こじ開けて抱き抱えている物を掴み出す！

『何である娘ミイラに平氣で触れるの？俺、ヤダなあ……』

「おおおおー見てみー！」つづいてお宝を抱えてるで「ハイツー！」

そう言つとミイラが抱き抱えていた『黄金の爪』をリュカ達に見せつけはしゃぎ出す。

すると何処からともなく不思議な声が聞こえてきた。

『黄金の爪を奪う者に災いあれ！』

「な、何や！？何処から聞こえんの！？」

みんなが周囲を見回していると、突然石棺の中のミイラがエコナの腕を掴んできた！

「ぎゃー！ー！」

慌てたエコナはミイラの手をがむしゃらに払いのけ、半泣きでリュカの後ろに隠れる。

しかしミイラは執拗にエコナを追いかけてきた！

「ふん！」

しかしリュカが鋼の剣で細切れにして、ミイラはその場に崩れ去る。

「何でウチを狙うねん！絶世の美少女やからか？」

「…………その黄金の爪が目当てじゃないの？返したら？」

「何言うてんねん！ピリミッシュ内で見つけたアイテムは、ウチ等の自由にしてええねん！女王様のお許しがあつたやん！だからこのお宝は、ウチのやー！」

どうやらエコナは黄金の爪を手放すつもりは無い様だ。

（ゴソゴソ……）

「んー？」

行き止まりであるはずの石棺の部屋の奥から、何やら蠢く影が……

「な、何でしようか？」

奥から現れたのは、火炎ムカデや大王ガマといったモンスター達だった！

しかも途方もない数が……

「げー！さすがにヤバいって！逃げるぞ！」

リュカ達は一斉に元来た道を走り出す！

しかし前からもミイラ男やマニーが大量に襲いかかってくる！

「くつそ！」

前方から襲い来る敵をリュカが薙ぎ払い、後方から追い縋る敵を工コナとハツキが連携して撃退する！

ウルフは気絶しているアルルを背負い、敵の攻撃を避けまくる！心なしか動きがリュカに似てきた様な……

「なあ、工コナ！」

「な、何やあ！」

「コイツ等の田舎てつて、その黄金の爪じゃね？捨てちやえよそんなの！」

「イヤや……」これはウチんや！

その間もモンスターは絶え間なく襲いかかってくる！  
さすがに工コナとハツキは押され気味だ……しかしリュカには疲れが見えない！

既に100体以上のモンスターを倒しているのに、顔色も変えずに前方の敵を倒し進み続ける！

刃こぼれの生じてしまった鋼の剣をアルルに返し、ドラゴンの杖でミイラ男やマニーを倒しまくる！

後方からの敵に押し潰されないでいるのは、リュカが前方の敵を駆逐し、逃げ道を作り出しているお陰である。

「おい！逃げ道は僕が作るから、遅れるなよ！」

ウルフ達は必死でリュカについて行く！

「イシス」

「……」

イシスの宿屋でアルルは目を覚ました。

「おはよ。足の具合はどう?」

リュカは優しくアルルの足を触り確認する……だが、痛みはなく

アルルは慌てて折れてた足を触り確認する……だが、痛みはなく

骨折も完治している。

「……私はどうなったの?」

「え……憶えてないの……結構大変だったんだよ!」

そうは言つが、リュカは笑顔でアルルに説明してくれた。

「…………それでみんな疲れ切つて寝てるのね……」

部屋の中を見渡すと、ウルフ達が薄汚れた恰好のまま、床やソファーにだらしなく眠つている。

「ごめんなさい……迷惑かけちゃつたね……」

「うん。大迷惑だよ」

リュカは笑いながらアルルの頭を撫でる。

しかし急に真面目な表情になり、アルルに苦言を呈す。

「アルル!あんまり僕を当てにした作戦を立てないでくれ!確かに僕は年長者の為、君達よりは多少強い!」

いや、多少ではないだろう……アルルはそう思つたが、あえて口には出さなかつた。

「でも僕はこの世界の人間じゃない!元の世界に帰る術が見つかれば、直ぐにでも帰るだろ!……もし、あのピラミッド内にそんな装置があつたのなら、僕は直ぐさま帰るだろ!僕の事を当てにして、ダンジョンの奥に進んだ場合、急に僕が居なくなつたらどうする?僕が居なくとも町まで帰れる様にしないと……」

アルルはこの時初めて分かつた……リュカが戦闘をしないのは、自分たちがリュカに依存しない為だと……

「焦っちゃダメだよ。一旦退く事も大事だよ。アルルは勇者なんだから、みんなを導かないといと……」

そしてリュカは自室へと引き上げた。

床等で泥の様に眠る仲間を…ボロボロに薄汚れるまで戦つた仲間を見て、涙を流すアルル…

自分が彼等の命を握っている事に気付き、責任の大きさに涙が止まらない…

アルルは思う…

リュカに出会つてなければ、アリアハン大陸で命を失つていただろう…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6325x/>

---

ドラゴンクエスト? そして現実へ...

2011年11月30日22時14分発行